
仮面ライダーW〜Another World Returns〜

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW\Another World Returns\

【Nコード】

N9324Z

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

神都を護る戦士『仮面ライダー』そんな彼等を待ち受ける物語が今、再び始まった。

『仮面ライダーW\another world story』
の続編始動！ 格ライダーの物語を中心に再始動する！！

1－1話：切り開くF／巻き込まれた男（前書き）

あの物語が再び！

1-1話：切り開くF／巻き込まれた男

ユーノ・スクライア……上条当麻の相棒にして、高町なのはを妻に持つ青年。

そんな彼は、養子のヴィヴィオとなのはが宿した新たな命の父親でもある。

今回は、彼を中心にした物語が始まったのであった。

―切り開くF／巻き込まれた男―

藍染惣右介率いる組織の起こした『英霊の記憶』事件から数日後…

「ふうー、こんなモノかな？」

ユーノ・スクライアは、相棒の上条当麻と共に久々の『万時屋』家業に勤しんでいた。

すると、突如電話が鳴り出した。

「もしもし？」

受話器を手にとったユーノ。

『僕だ』

電話の相手は悪友のクロノ・ハラオウン。

「何だお前か？」

『随分な挨拶だな。折角仕事の依頼を持って来てやったのに』

それを聞いたユーノは、溜め息まじりでこう言った。

「で、依頼は？」

『実は新しい資料が届いているんだが、中々まとまっていないんだ』

「その資料の片付けの手伝いをして欲しいと？」

『そうなるな』

「分かったよ。ただし、報酬は弾めよ」

そう言って電話を切り、ユーノはすぐさまコートを羽織った。

「じゃあ、当麻君。行ってくるよ」

「気を付けろよ。後今日は出産日だからな」

「分かってるよ」

実はなのはは、新たな命を身籠っていて、その出産ために病院に入院しているのである。

以前ユーノは、なのはと“一緒に出産に立ち会う”という約束をしていたたので、今日はその約束の日なのであった。

警視庁の資料室に入ったユーノであったが、

「な……何これ？」

分厚すぎる資料の量に驚きを隠せなかった。

「実は整理を頼んでいた刑事が仕事をサボったのでな……全く整理できてないのだ」

「何処のどいつだよその刑事は！」

「無論、そいつらにも然るべき処分をする」

因みにサボった刑事というのは、石垣と真倉である。

「分かったよ、出来るだけ半分以上に減らすから」

「そうしてくれ、報酬は高く払うから」

そう言ってクロノは資料室を後にし、ユーノは資料の整理を急いだのであった。

一方その頃、病院では……

「そっか……ユーノ君、来れないのか」

出産を迎えているのはな、夫が来ない事で少し寂しくなった。

「心配すんな。アイツは約束を破るようなヤツじゃないからな」

それを聞いたのはは、少し元気になった。

「んじゃ、俺は一回事務所に戻るけど……何かあったら呼んでくれよな」

そう言って上条は病室を後にした。

資料室で資料の整理を行っていたユーノ。

「ふう……やっとなんなモンか」

そう言って先程の2分の1を片付けたのである。

すると、一人の人物が現れた。

「失礼するよ」

この街の警視庁の刑事・笹塚衛士であった。

「はい、これ差し入れ」

そう言って笹塚は、缶コーヒーを彼に渡した。

「あ、すみません」

「まあ、本来は俺達警察のやることだからな。 キレの良いところで止めても構わないよ」

笹塚は最後にそう言って立ち去ったのであった。

「よし、早く終わらせないと」

再びユーノは資料に目を通したのであった。

資料の整理を行って30分後。

「ユーノ君、差し入れ持ってきたで」

そう言って八神はやてが弁当を持ってきたのである。

「すまないはやて」

「ええよ、ええよ。これくらいは朝飯前や」

するとはやては、資料室に目をやると、

「大分片付いたんやな」

「まあね」

「ユーノ君、何時も思ってたことやけど……」

「ん？」

「ユーノ君は何でもかんでも背負い過ぎや、少しは誰かに甘えたりせえへんの？」

「そ、それは……無いかな……甘えたくても甘えられなかったから」

「あ……スマン、つい………」

「良いよ、はやてだって悪気は無かったんだし」

「じゃあ、私は失礼するで」

そう言うってはやては資料室を後のした。

一方の警視庁内では、覆面を被った男達が銃を持っていた。

「俺達は『避ける闘魂』だ！ この警視庁は俺達が支配した！！」

そう言って引き金を引いたのであった。

「わあああああああ」

「きゃーーーーー！！」

「騒ぐんじやネエエエエエエエ！！」

テロリストに占拠された警視庁は一体どうなるのであろうか、そしてユーノの運命は！？

（3年W組 上条先生）

上条

「はい、皆さんお久しぶりです。久々にご登場させていただきましたので一つだけ言っておこうと思います。この小説は文が短いので、『上条先生』で行数を稼いでいるのでご注意ください貫いたと思います。以上!」

一方通行

「…………大丈夫かよ、この小説?」

上条

「大丈夫だ……………多分」

一方通行

「多分かよ!?!」

1－1話：切り開くF／巻き込まれた男（後書き）

次回、切り開くF／強がらなくても良い

1-2話：切り開くF／強がらなくても良い（前書き）

後編です。

1—2話：切り開くF／強がらなくても良い

神都のとある病院。

「よう、お待ちせ」

上条とインデックスが、差し入れを持って病室を訪れた。

そこには、なのはだけでなく高町家の人々もいた。

「——ってあれ？ ユーノは？」

しかし、一番重要な人物が現れていなかった。

すると、テレビであるニュースが流れた。

『臨時ニュースをお伝えします。 たった今入った情報で、警視庁をテロリスト集団が占拠したという通報がありました』

「え！？」

上条はそのニュースを聞いて、背筋をゾクリと凍らせた。

「まさか……」

その時であった、

「うっ………」

「え、なのは!？」

突如なのはが苦しみ出したのだった。

「俺、ちょっと外を見てくるわ！」

「あ、とうま！」

上条は襲いで外に出ると、携帯電話に手を掛けた。

無論、電話の相手は……

―切り開くF／強がらなくても良い―

資料室からも響いた銃声に反応したユーノ。

「銃声!？」

すると、彼の携帯電話が鳴り出し、ユーノは電話を取った。

「はい！」

『相棒、無事か?』

「当麻！」

相手は相棒の上条当麻。

『状況は!？』

「資料室からも銃声が聞こえただけで……」

『俺もニュースで聞いただけだから詳しく分からない。ただ、警視庁内にテロリストがいるってことだ』

「冗談だろ!？ 僕だってやっとで資料が半分以上終わったところなのに」

『いや、それは別に良いだろ！？　後でクロノに請求すれば良いじゃないか！』

「それで、どうする？」

『俺は状況を把握して、裏口から回る』

「分かった、僕は中から何とかするよ」

『気を付けろよ、相棒！』

そう言って二人は電話を切った。

「（サイクロンに変身しても良いけど、生憎ロストドライバーは持って来てないし…………）」

ユーノは懐を確認するが、

「あ……………」

あるモノが無い事に気付く。

「しまった…………メモリが…………」

それは、サイクロンを始めとする所有メモリが無い事であった。

「クソッ、余り使わないと思ってデスクに置きっ放しだった」

ユーノは今回の自分のミスを後悔してしまう。

裏口から入った上条は、ユーノのメモリを眺めながら呟く。

「どうかアイツ……いくら事件が起きてねえからって、メモリを忘れやがって」

文句を言いつつも、メモリを手にとって来ている上条。

「さて、どう動くか……」

「つゥーかよオ、どオせなら連中を攪乱させた方が良インじゃねエか？」

一方通行と浜面仕上の二人も一緒に来ていた。
アクセアラレータ

病院を出た際、最初に二人に電話掛けた上条は、助太刀を依頼したのだった。

「さて、どうするんだ？　攪乱って言っても、相手は武器持ってる

ぜ？」

上条がそう言うが、浜面がこう答えた。

「とりあえず一人は連中のフリをして、もオ一人が連中を潰していく、そしてオマエが相棒を助けに行く」

「成程な」

そう言って三人は、実行に移ったのであった。

庁内を歩き回る『避ける闘魂』の一人。

彼らは嘗ての『萌える闘魂』のメンバーで、捕まった仲間たちの解放を目的で警視庁を乗っ取ったのであった。

「まったく、何が見回りだよ……」

団員が文句を言いながらも見回りをする。

しかし、その時であった。

カランカランと何かが転がっていた。

「んあ？ 何だこりゃ？」

団員がそれを拾った瞬間、

「動くなよ」

後ろから掛けた声に、ゾクリと背筋を凍らせた。

「動くなよ？ 動いたら命はねえと思え」

その人物はそう言って、団員の頭に銃口を突き付ける。

「安心しろ、命までは取らねえ。暫らく寝て貰うぜえ」

「ガッ！」

『彼』は団員の頭を殴って気絶させた。

「さて、どうするか……」

ユーノは資料室を出た後、周りを確認しながら歩き出す。

「どうするか……」

すると彼は、ある場所を眺めた。

「クソッ、見張りか……」

そこには多くの見張りが銃を構えていた。

「どうすれば……」

そう言ってユーノは慎重に窺うが、

「動くな！」

「!!」

後ろから頭に銃口を向けられてしまう。

「手を挙げる！」

「……………」

指示に従い、向こうへと歩く。

「おい、まだサツがいたぜ」

警察と勘違いされているようで、流石のユーノも身動きが取れなかった。

「此方B班。警察の人間と思いき男を発見した。応答を――」

団員の一人が仲間に連絡を入れようとするが、

『ギャアアアアアアアアアアア！！』

「!?!」

突如、彼等の仲間の叫び声が聞こえ、

「おい、どうした!?! 応答しろ!?!」

男が連絡するも、応答がない。

暫らく経ってから、トランシーバーから声が聞こえた。

『ハァーイ、クソ野朗共。今からテメエ等を地獄に送ってやるよ
オ』

その声を聞いた彼らは、ゾクリと背筋を凍らせた。

『此処は今、一階だったア？　ンじゃ、今からそっちに来るからよ
オ……首は洗ってとけよ』

そしてその声は、プツリと切れたのであった。

「ドドドドドドドドどうするんだ!？」

「知らん！　早くこれを他のやつに——」

団員達が慌てだし、他のメンバーにも連絡しようとしたその時であった。

パリーンという音と共に、ガラスが割れ、

「よォ、遊びに来たぜェ！」

その姿は白い髪に赤い瞳という、まるで獣を印象付ける姿を見せる青年であった。

「御方付けだ、10分で終わらせてやるよ！」

彼はそう言って、軍団に突激し、

「「「グワアアアアアアアアア！」」「」」」

軍団はその場で倒れたのであった。

警視庁のとある部屋。

「フフフフ……悪く思ふなよ？」

「クッ」

リーダーと思いしき男が、クロノに銃を突きつけていた。

すると男は、懷からメモリを取り出し、

【スコープオン】

それを首元に差し込んだ。

その瞬間、男はサソリを模した怪人・スコープオンドーパントと化した。

「ガイアメモリだと！？ 組織は壊滅したはずじゃ！！」

「裏社会を舐めんなってことだよ」

スコピオンドーパントはそう言ってクロノに顔を近づけるが、

「成程、そういう事か」

「「!？」」

突然の声に二人は驚きを隠せなかった。

「よう、クロノ」

そこには、上条当麻とユーノ・スクライアの二人がいた。

「つたく、テロに捕まる警視庁か……コリャ笑いもんだぞ？」

そう言って上条は、ダブルドライバーを装着し、ユーノの腰にもドライバーが出現する。

「んじゃ……とつとと済ませるぞ、相棒」

「ああ、勿論。 来い、フアング！」

その瞬間、何処からかともなくフエングメモリが出現し、手に乗せたユーノがメモリモードに変形させた。

【FANG】

【JOKER】

「「変身!!」」

上条がジョーカーメモリを差し込んだと同時に、ユーノのドライバ―に転送され、転送されたメモリをユーノが差し込んだ後にフアングを差し込んだ。

【FANG・JOKER】

その瞬間、ユーノの姿が白い右半身に黒の左半身、鋭さを思わせるボディにW型の触覚と赤い複眼の戦士に変身した。

白き切り札、仮面ライダーW・フアングジョーカーが此処に光臨した。

「ガウ！」

Wはスコピオンドーパントに突撃し、そのままガラスを突き破って外へと落ちたのであった。

スコピオンドーパントを地面に叩きつけたWは、タクティカルホーンを一回弾いた。

【ARM FANG】

アームセイバーを振るい、スコピオンドーパントを切り裂くW。

「ハッ！」

「ガァ！」

容赦無く吹き飛ばされたスコピオンドーパントは、

「クソガッ！」

頭部の装飾の尻尾の部分が鞭の様に伸び、先端の針で刺し殺そうとするが、

「ウラァ！」

Wはアームセイバーで切り落とした。

「一気に決めてやるよ！」

そう言ってWは、タクティカルホーンを三回弾き、

【FANG MAXIMUM DRIVE】

マキシマムセイバーを出現させ、

「『フアングストライザー！！』」

回転蹴りの要領で放つフアングジョーカーの必殺技『フアングストライザー』が、見事に炸裂した。

「ガアアアアアアアアアア！！」

『フアングストライザー』を喰らったスコープオンダーパントは、爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕けたのであった。

「んじゃ、早くお前は病院に行け。もうすぐ出産みてえだぞ？」

「え、ホント！？」

「俺から伝えとくから」

「すまない！」

そう言って変身を解除したユーノは、すぐさま病院に向かったのであった。

病院に駆けつけたユーノ。

「なのは！」

「ゆ、ユーノ……君」

苦しみながらもその姿を確認したなのは。

「しっかり……」

「来て……くれたんだ」

「約束したからね」

そう言って二人は、看護師達や助産師と共に緊急治療室へと向かった。

なのはが緊急治療室に入って数分後、

「なのはが出産って本当ですか!？」

桃子からの連絡を受けたフェイトも駆けつけ、扉の前は緊張でソワソワしていた。

暫らくたって数分後、

「オギャアー! オギャアー!」

大声で泣く子供の声が聞こえた。

「産まれたようね」

「ホッ……」

桃子もフェイトも、その鳴き声を聞いて安堵したのであった。

緊急治療室の方では、

「おめでとう御座います。 男の子です」

そう言って元気に泣く赤ん坊を二人に見せる看護師。

「良かった……」

「頑張ったね、なのは」

「うん／＼／＼／＼／」

歓喜の涙を流しながら、二人は新たに生まれた家族の顔を眺めたのであった。

その翌朝、ユーノは病室に来ていた。

「赤ちゃんは？」

「寝てるよ」

ベッドの上のなのはは、腕の中に抱かれている赤ん坊を抱きながら笑顔を見せた。

「可愛いね」

「うん」

スヤスヤと眠る我が子を見て、ユーノはこう言いだした。

「そう言えば、この子の名前……考えたんだけど……」

「ん？ 何々？」

ユーノは息子の名前をユツクリ教える。

「佑希……“多くの人々を助け、希望を持たせる人間”という意味を込められてるけど、どうかな？」

それを聞いたなのはも気に入ったようで、笑顔で答えた。

「良い……凄く良い名前だよ」

「良かった」

「ユーノ君、ちょっと……」

「ん？」

するとなのはは、ユーノの顔を自分の顔に近づけ、そのまま唇を合わせた。

「ん!？」

「ん……んは……」

「な、なのは？」

驚くユーノに、なのはは優しく言った。

「ユーノ君、もう自分で抱えようとしなくて、時にはめい一杯甘えてね／＼／＼／」

「なのは……」

自分の抱えている事を既に見抜いた妻の思いを胸に、ユーノはなのはを優しく抱きしめた。

「……………有難う」

その目には、一粒の涙が零れていた。

一方、警視庁では……

「なななななな何だこれはアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

「何って依頼料の請求書! ソレぐらいは当たり前だろ?」

上条当麻は、クロノに依頼料の請求書を見せた後、そのまま机に叩き付けた。

「言っておくが、上条さんは本気ですからね。しっかりと払ってもらいますからね!」

過去にクロノからの依頼の分を含めた依頼料の金額は、既に10万
以上を超えていた。

すっかり忘れていたとはいえ、請求金額を見て愕然としたクロノは、

「不幸だアアアアアアアアアアアアアア！」

『ムンクの叫び』のようなリアクションで叫んだのであった。

1－2話：切り開くF／強がらなくても良い（後書き）

次回は第二章・ジョーカー篇です。

第1話：やって来たS／若き『骸骨』の登場（前書き）

桐生乱桐さんの希望で、あるキャラを準レギュラーにしたいと思います。

第1話：やって来たS／若き『骸骨』の登場

とある世界、そこに一人の少年がいた。

「ふう、こんなもんか」

彼の名は鏡祢アラタ。かがみね

『とある魔術の禁書目録』戦いの神と呼ばれた男インデックスの主人公で、複雑な理由で魔術師の下で働いている。

上司・蒼崎橙子の受けた仕事を終え、そのまま帰るつもりであったが、

「!?!? 何だよ、コレ!?!?」

突如現れたオーロラに、驚きを隠せなかった。

しかし、彼の中の何かが語りだした。

「何なんだこのオーロラは……事件の予感がする」

そう思い、彼は事件の予感と好奇心を持ちながら、その中へと入ったのであった。

「スマンなアラタ、少し遅れ——」

その数分後、蒼崎橙子が戻ってくるも、

「あれ、アラタ？」

しかし、そこには誰も居なかった。

―やって来たS／若き『骸骨』の登場―

上条当麻は何時もの不幸体質が災いした。

「ハア……不幸だあ……財布を何処かに落とすわ、何も無いところで13回転ぶわ、13回も靴紐が切れるわ、ホントに不幸だ………」

溜め息を付きながらも、上条は歩いていた。

それにしても、13回も転んだり靴紐が切れたり、どれだけ不幸体質なんだろう？

「作者、それは俺が聞きたいよ」

そんな彼に、更なる不幸(?)が舞い降りてきた。

というより、落ちてきた。

「ん?？」

突如頭上が暗くなったコトに気付き、空を見上げると……

「うわあああああああ！」

「んが！」

突如一人の人間が落ちてきて、そのまま上条の上に落ちたのであった。

「いってえ~~~~~」

涙目でそう言うと、

「悪い！」

その人物は詫びながら上条の上を降りた。

「不幸だあゝ。まさか空から人が落ちてくるなんて……」

鏡柙アラタは、どういうわけか空から落下してきた。

そしてそのまま、偶然人の上に落ちてしまう。

「悪い！」

その人物に詫びながら降りた。

「不幸だあゝ。まさか空から人が落ちてくるなんて……」

そう言って彼はネガティブになってしまおうが、

「ん？」

アラタはその人物の顔を見て、少し驚いてしまう。

「（この人……当麻に似てないか？）」

そう思いながら手を差し伸べた。

「とりあえずスマナイ。ワケありで落ちてしまったんだ」

「ワケありって、どんなワケがあって空から人が落下するんですか？」

「だよなあゝ」

青年の問いにアラタは、少し苦笑いをしてしまった。

二人は近くの公園で休憩し、ジュースを飲む。

因みにジュースは上条の奢りである。

「そういや、名前聞いてねえな。俺は上条当麻だ」

そう言って右手を差し出す上条に、

「あ、ああ……鏡柝アラタだ」

アラタは左手を握って握手する。

その瞬間アラタは、内心想ったのだった。

「（もしかして……この世界の当麻なのか？）」

元の世界では同級生の少年が、18歳の青年になっていたので少し驚いた。

「ところで、アラタは何で空から降ってきたんだ？」

上条の問いに、アラタは少し悩んだ後にこう答えた。

「えーと……上条……さん……」

「あ、当麻で良いよ。わりと齡は近いし、それとタメ口で構わないぞ」

「そうか、んじゃ……当麻、一つ言っておきたいんだけど……」

「ん、何だ？」

「お前……『異世界』って言うのを信じるか？」

「え!？」

それを聞いた上条は、少し驚いたのだった。

「まあ……お前が来る少し前に、異世界から来たヤツがいたからな」

“異世界からの来訪者”について、上条は少しだけ語りだした。

それを聞いたアラタは、少し驚いてしまうが、すぐに納得した。

因みに、上条が何故“異世界からの来訪者”について驚かなかったのは、前作『仮面ライダーW×another world story』を読んで下さい。

「それにしても、お前の世界の『俺』も記憶喪失か……」

上条はアラタの話を聞いて、“彼の世界の自分が記憶喪失になっている事”を知るが、自分も記憶喪失であるため、予想は付いていたような態度を見せる。

「ところでアラタ。お前、宛があるのか？」

「あ、そう言えば……」

食事や衣服は何かなるが、肝心の住む場所が無ければ、生活が辛い状況になる。

「もし良かったら、俺の事務所に来ないか？」

「良いのか!？」

「ああ。部屋も結構空いてるし、メシも一応あるぞ？」

それを聞いたアラタは、

「（どの世界でも、当麻のお人良しは変わんねえな）」

目の前の『上条当麻』の優しさ（と言う名のお節介）に少し感心し、

「んじゃ、よろしく頼むぜ」

「おう！」

彼が所長を務める『万時屋』で居候になるのであった。

事務所まで歩く二人であったが、

「あ、悪い」

プルプルプルと上条の携帯電話が鳴り出し、彼はそれをポケットから取り出した。

「もしもし？」

『当麻、僕だ！』

「ユーノか！？　どうした！」

『実は“例の行方不明事件”の依頼が来たんだ。　すぐに戻ってきてくれ！！』

「分かった！」

そう言って上条は電話を切った。

「アラタ、イキナリで悪いんだけど、初仕事だ！」

「ああ、何時でも良いぜ！」

血相を掻く上条に、アラタは笑いながら答え、

「とりあえず、事務所まで走るぞ！」

「おう！」

二人は、事務所まで走り出したのであった。

「ちょこつと、上条先生！」

上条

「はい、明けましておめでとう御座います。久しぶりにこのコーナーをやらせて貰います。次回からは、この皆さんの小説に関する質問をお答えしたいと思います」

アラタ

「次回からは、俺も戦いに出るから宜しくな」

上条

「というワケで作者。暫らく廊下に立ってなさい！」

アラタ

「意味あるのか？」

上条

「特になし！」

アラタ

「無いのかよ!？」

ユーノ

「何時ものことだから、余り気にしないで」

上条

「それともう一つ……」

ユーノ&am p;アラタ

「ん？」

上条

「誰か、挿絵を描ける人を知らねえかアアアアアアアア！！」

ユーノ&am p;アラタ

「ソレが言いたかっただけかよ！！！」

第1話：やって来たS／若き『骸骨』の登場（後書き）

桐生乱桐さん、準レギュラーを有難う御座います！

そしてこれが、2012年初の投稿です。

第2話：やって来たS／さあ、お前の罪を数えろ！（前書き）

遂に、骸骨戦士と疾風の切り札が！

第2話：やって来たS／さあ、お前の罪を数えろ！

仮面ライダーW Another World Returns

、前回の三つの出来事。

一つ：鏡祢アラタが謎のオーロラに飛び込む。

二つ：上条とアラタが会う。

三つ：ユーノの連絡を受けた二人は、事務所に戻るのであった。

事務所に戻った上条は、一度アラタを紹介した後、ユーノから事件の内容を耳に入れた。

事件内容は、毎晩女性が行方不明になってしまうという事件が起きており、上条達が受けるのは、その犯人を捕まえる事であった。

「僕は検索を開始するから、事件の手掛かりになるモノを見つけてくれないか？」

「了解、頼むぜ相棒！」

そう言って上条は、アラタと共に外へ出たのであった。

―やって来たS／二大ライダー見参！―

行方不明があつた場所へ向かうと、二人は疑問を感じ取った。

「オカシイ……………」

「ああ。　コレだけ広い現場で、誰も気付かないっていうところが……………」

人目に付きそうな場所で事件が起きていると分かった二人であったが、此処で違和感を感じた。

「犯人は、ワザと人目に着きそうな場所で犯行を行っている」

「他に何か手掛かりがあれば良いんだけど……」

すると、上条の携帯電話が鳴りだした。

「もしもし?」

『あ、上条さんですか? 初春です』

電話に出ると、初春飾利の声が聞こえた。

「おう、どうしたんだ?」

『実は、警察が万時屋に連続行方不明事件の依頼を申し出たという情報を耳にしまして』

「……何か分かったのか!？」

『ええ、調べた結果……行方不明になっている女性は皆茶髪だったそうです』

「茶髪？」

『ええ。それ以外の情報は、未だに掴めませんが』

「いや、助かったよ。サンキューな」

電話を切った上条は、すぐさま相棒に連絡する。

「もしもしユーノ？ 検索して欲しい事があるんだ」

その際、アラタはある事に気付いた。

「ん……まさか……」

「『女性』……『夜』……『茶髪』……此処までは分かった。で

も流石にコレだけでは絞れないよ？」

『ワインズマン賢者』を発動させたユーノは、自らのパーソナルリアリティ個人現実^{パーソナルリアリティ}に飛び込んでいた。

『マジかよ……参ったな………』

上条が電話の向こうで困っているが、

『ユーノさん、『鏡』じゃダメですか？』

その瞬間、バラバラの謎が一つになった。^{パズル}

「ビンゴだよ、アラタ君！」

『ヤッパ鏡でしたか………』

「ああ、コレで相手の正体が割り出せる」

そしてユーノは、二人に犯人の正体を教えた。

その夜、一人の女性が大通りを歩いていた。

彼女が鏡の前を通り過ぎた瞬間であった。

「シャアアアアアアアア！」

一体の怪人が、女性に向かって飛び掛かって来たのだ。

だがしかし、思わぬ出来事に遭遇する。

「ちえいさアアアア！」

まるで予期していたかのように、彼女は回し蹴りを叩き込んだのだ。
った。

「ガッ！」

吹き飛ばされた怪人に、二人の人物が現れた。

「待ってたぜ、この変態ヤロウ」

上条当麻と、鏡祢アラタである。

「お前等……何故此処が!？」

怪人・ミラードーパントが驚きを隠せずにしたので、上条が堂々と答えた。

「簡単な事だ。まず、なぜ被害者たちは大通りで行方不明になったのか……これはロードミラーや鏡、もしくは姿が映る物がある場所を犯人が選んでいたとしか考えられないからな」

さらにアラタが、追い討ちを掛けるようにこう言ったのだった。

「その犯行に使うメモリはミラー……即ち鏡のメモリだ。鏡の中を移動すれば、誰だって見つからないからな」

「おのれええええええええ！　ぶっ殺してやる!!」

遂に怒りを露にしたミラードーパントであったが、アラタと上条は平然にこう言った。

「やれるもんならやってみろ」

「だが、その頃にはアンタは八つ裂きになってるかもしれないけどな！」

「——って、何で『刀語』？」

「一度言ってみたかった」

そして二人は、ドライバーを装着し、メモリを構えたのであった。

無論、事務所のユーノも、ドライバーを通して意志は伝わっている。

【SKULL】

【CYCLONE】

【JOKER】

「「!？」」

互いに相手のメモリに驚きを隠せない二人であつたが、目の前の敵に集中した。

「「変身!」」

アラタは一度帽子を脱いだ後にメモリを差し込み、スロットを横に倒した。

【SKULL】

上条はドライバーに転送されたユーノのメモリを差し込み、それに続くようにジョーカーメモリを差し込んで横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

上条とユーノはWに変身し、アラタは骸骨のようなマスクに黒いボディの戦士に変身して一度脱いだ帽子をS字型の傷を隠すように再

び被った。

疾風の切り札・仮面ライダーWと若き『骸骨の記憶』の戦士・仮面ライダースカルが今、肩を並べて立っていたのであった。

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

ミラードーパントに跳び込むように、キックを叩き込んだW。

しかしミラードーパントは、すぐに避けると、鏡へ走り出したのであった。

それを見たスカルは、すぐさまマグナムを取り出して引き金を引いた。

放たれた弾丸は、鏡に命中してパリインと割れたのだった。

「な!？」

「いくらお前でも、鏡を失ったら逃げ道は無いよな？」

スカルは深く帽子を被り、ミラーダーパントに銃口を向ける。

ドンドンと放たれる弾丸を受け、ミラーダーパントは逃げる方法と体力、そして余裕を失ったのであった。

「これで決めるぜ」

【SKULL・TRIGGER】

上条がそう言った後、Wはスカルトリガーにチェンジし、スカルと肩を並べる。

「いくぜ、アラタ」

「……………ああ」

二人はマグナムのスロットにスカルメモリを差し込み、トドメに入った。

【SKULL MAXIMUM DRIVE】

「クッ……………クソオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

恐怖を感じ取ったミラーダーパントは、再び逃走するも、それは完全に意味が無くなったのだった。

「「「ライダー……………ツインマキシマム！」」」

銃口から放たれる髑髏状を模した紫の弾丸は、そのまま真っ直ぐにミラードーパントに命中し、

「グワアアアアアアアア！」

ミラードーパントは、その場で爆発したのだった。

ミラーメモリは砕け、メモリの所持者である男も逮捕された。

そして行方不明の女性たちも無事に救出され、事件は解決したのだった。

「というワケで、新ためてウチの事務所に働く事になった鏡柊アラタだ。皆、仲良くするように」

「宜しく願います——って転校生が来た時の学校かよ!？」

突然の上条のボケに、アラタは見事にツツコミを入れた。

「ユーノ・スクライアだ。分からない事は、何時でも聞いてくれ」

「妻のなのは・スクライアです。宜しくね」

「インデックスって言うんだよ。あらた、宜しくなんだよ」

「紫馬アトリ、宜しく」

「よし。挨拶も済んだ事だし、今夜はアラタの歓迎会だ！」

こうして、鏡祢アラタは万時屋メンバーの一員となったのであった。

「教えて、上条先生」

上条

「はい、久しぶりに来たお便りをご紹介したいと思いますペンネーム『鳴神ソラ』さんのキャラからの質問です」

マリオ

「別世界の主人公が来たな」

ネス

「そうだね」

アネク

「これはコア大戦を元にしてるのだろうか…メモリーメモリでの過去を見るのは誰なのやら」

リュカ

「そうですね…」

ルイージ

「早速質問です『赤ちゃんを見た感想は?』」

アネク

「質問だ『それぞれの章は何の話を元にしてるんだ?』」

次回を待っています！

「質問？」

ユーノ

「もう、とても可愛いとしか言いようがないよ。髪の色と笑顔はなのはそっくりだし♪／／／／／」

なのは

「瞳が翡翠色なのは、ユーノ君譲りでとても可愛いの／／／／／」

ヴィヴィオ

「可愛すぎて、思わず胸がキュンってなるの！／／／／／」

「質問？」

虎龍

「特に何もありません」

上条

「というワケで、次回も宜しく」

第2話：やって来たS／さあ、お前の罪を数えろ！（後書き）

次回も宜しくお願いします。

第3話：語るK／思い出はちゃんとアルバムに仕舞うべし（前書き）

思い出話です。

第3話：語るK／思い出はちゃんとアルバムに仕舞うべし

ソレは、なのはが引き出しの整理をしていた時であった。

「ん？ 何コレ……」

彼女が手に取ったのは写真で、それに写っていたのは…

「な!？」

そこには、抜群のプロポーションを持つ二十代の女性が上条の肩に手を置いている場面が移っていた。

しかも女性は、かなり露出度の高い水着を着用していた。

―語るK／思い出はちゃんとアルバムに仕舞うべし―

「ふえエエエエエエエエエエ！？／／／／」

この写真を皆なのはは、驚きを隠せず、さらには顔を真っ赤にする。
すると、仕事帰りの上条が現れた。

「ただいまあゝ」

「キャア！」

突然の声に反応してしまい、なのははつい写真を落としてしまう。

その瞬間、写真はヒラヒラと舞い、上条の足元に落ちてしまう。

「ん?」

上条はその写真を拾い上げ、なのはは慌てて言い訳をしようとした。

「そろそろそれは、ググググ偶然拾ったもので――」

「うわぁ、懐かしいなぁ」

「へ？」

この瞬間、空気が一気に変わった。

場所を翠屋に移した上条達は、写真を眺めたのであった。

「家族写真？」

「ああ。 去年の夏に父さんからの連絡があって、休みが取れたから一緒に海に行かないかって言われたんだ」

上条が家族と海に遊びに言った時の事を思い出しながら、桃子が用意したケーキを食べる。

「（年齢のわりに若い女性は結構いるけど、これは流石に若すぎでしょう！　どんな秘訣で肌を維持してるの！？）」

「俺的には、桃子さんも凄い若い方だと思うけどな……」

「あら、そう？」

年齢のわりに若い女性で、上条は桃子が一番若いと思っていたらしい。

まあ、世の中凄い人がいるということである。

数分後、落ち着きを取り戻した高町家と共に、再び写真を見ることになった上条。

「次は、この人かな？」

「それは誰？」

美由希がそう言って写真を覗く。

「御坂の母親の美鈴さん」

その写真には、御坂美琴をまるで大学生にしたような女性が写っていた。

「これもお母さあああああああん!？」

どう見ても母親とは思えない外見を持つ美鈴の姿に、再び高町家は混乱した。

「因みに、美鈴さん。今は大学に入って一から勉強し直してるんだって」

「しかも現役女子大生!？」

「（詩菜さんといい…美琴ちゃんのお母さんといい……………当麻君の周りの女性って一体……………）」

もう、頭の中が混乱してしまい、何がなんなのかが分からなくなっていた。

「しかし、この写真……………失くしたかと思ったけど、引き出しに入ればなしだったのか」

そう言って上条は、一冊のアルバムを手に取り、

「ちゃんと入れとかないとな」

そう言ってアルバムの中に仕舞ったのであった。

事務所に戻った上条達が玄関を開けると、

「あ、遅いで当麻君！」

八神はやてが現れたのであった。

「おい、鍵はちゃんと掛けたぞ？ どうやって入ったんだ、この狸」

「普通に『狸』って言うたな！ それは良いとして、当麻君に頼みがあるんよ」

「金は貸さんぞ」

一応上条は、はやての依頼を聞くことにした。

「で、依頼は？」

「実はな、真選組に好きな人がおったんやけど……それが私の好きな人でもあったんよ」

「マジで!？」

「マジや」

顔を赤くするやはてに、上条は腕を組む。

「でも、何でお見合いに俺の協力が必要なんだ？
別にシャマルさんやシグナムさんに頼めば——」

「シャマルとザフィーラなら兎も角、シグナムとヴィータだと……
…その人を殺しかねないんや」

「……………うん、俺達に頼んだのが正解だったよ」

『主命!』であるシグナムとヴィータの性格を考えて、ホントにやりかねないと想像した上条は、すぐさま納得した。

「んじゃ、見合いは何時だ? その日に準備でもするから」

そう言って上条は、溜め息を付きながら頭を掻いたのであった。

するとはやては、見合いの日を教えたのであった。

「確か……………明日やけど」

「え?」

コレには万時屋一同は、沈黙したのだった。

そして、見合い当日…

「うううう………なあクロノ君、ホンマに来るんか？」

「ぼ、僕に聞くなよ」

付き添いということで、はやてと一緒にいるクロノ。

そして、松平が現れ……

「悪いなお二人さん。 コイツがスゲー緊張しててよお……」

「は、初めまして……山崎退と申します」

緊張気味の山崎がそう言ったのであった。

「（やっぱり、この人めっちゃタイプやあゝ♪／／／／／）」

山崎の顔を見た瞬間、はやては顔を赤く染めたのであった。

「それじゃ、後は若いお二人だけで……」

「僕らは失礼する」

そう言って松平とクロノは、その場を後にしたのであった。

そんな彼女達がいる部屋の隣の部屋では……

「なあ、当麻。俺達……何でこんな事してるんだ？」

「知らん！」

上条とアラタが、部屋に仕掛けたカメラを通じて、二人っきりになったはやてと山崎を映像越しで観ていた。

「まさか依頼の内容が、カメラから見合いを見てくれて奴だからさ……」

「全く、何か詰められた気がする」

そう思いながらも、映像を観る二人であった。

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

マリオ

「師とは違うスカルとの共闘だな」

ルイージ

「それで仲間入りしたね」

ソニック

「次はどうなるんだろうな？」

アंक

「亀鳥虎龍に質問だ『好きなライダーは何だ？』」

マリオ

「質問だ『銀時と荘吉のメモリを手に入れた話は入れるのか？』」

＼質問？＼

虎龍

「クウガ、カブト、W、ディケイド、オーズですね」

＼質問？＼

虎龍

「まだ決めてません」

上条

「はい、今日は此処まで」

第3話：語るK／思い出はちゃんとアルバムに仕舞うべし（後書き）

次回もお楽しみに。

第3. 5話：Rの説明／データ紹介（前書き）

単なるキャラ紹介です。

第3・5話：Rの説明／データ紹介

（キャラクター紹介）

上条当麻／仮面ライダーW／仮面ライダージョーカー？

年齢：19歳

能力：幻想殺し（イマジネブレイカー）

階級：Eランク

詳細：本作の主人公。

あらゆる異能を打ち消す右手を宿す『幻想殺し』を宿している。

右手を切り落としても、不透明な竜が出現する『竜王の顎』を発動させたり、切断面から再生するなど、未だに謎のままである。

ユーノの状況次第では、仮面ライダージョーカー？変身することがある。

ユーノ・スクライア／仮面ライダーW／仮面ライダーサイクロン

年齢：24歳

能力..賢者
ワインズマン

階級..Sランク

詳細..本作の主人公の一人。

上条の相棒として、なのはの夫として、ヴィヴィオと佑希の父という役割を背負うなど、ある意味では苦勞人である。

あらゆる知識を持ち、『検索』出来る能力を持つ。

上条の状況により、仮面ライダーサイクロンに変身することが出来る。

鏡祢アラタ／仮面ライダースカル

年齢..15歳

能力..直死魔眼
イーヴィルアイ

階級..Eランク

詳細..『とある魔術の禁書目録』戦いの神と呼ばれた男』の世界からやって来た少年。

蒼崎橙子の仕事をこなしている中、突如目の前に現れたオーロラから、事件の予感と軽い好奇心からそのオーロラをくぐり抜け、本作の世界にやって来た。

事件を解決するため、そして好奇心からこの世界に留まってみようと考えた。

高校一年の風紀委員。
ジャツジメント

嘗てはガタツクだったが、ある事件を境にスカルとなる。

服装は基本白スーツに白いソフト帽という鳴海荘吉スタイル。

ゆえにパツと見なら本当におやつさんと見間違えてしまう。

闘い方は自分でつけたスカルエッジというナイフとスカルマグナムを巧みに操る。

彼自身の能力は「イーヴルアイズ直死魔眼」と呼ばれ、その瞳で視た死の線、点を斬る、突くことで、対象を犯す力ころを持ち、その力で犯された場所ころは治る事はない。

右手は義手で、別名は『虚像幻想殺し（イマジンブレイカーもどき）』。

当麻と似た力だが、打ち消す、ではなく右手に魔力として蓄積する。

また、蓄積が限界を超えると右手の義手が吹き飛ぶというリスクがあり、おまけに限界がどれくらいがわからないという不始末。

なのは・高町・スクライア

年齢…24歳

能力…屈服の心【レイジングハート】

階級…Sランク

詳細…旧姓は高町なのは。

万時屋事務所の一階にある喫茶店『翠屋』の看板娘。

現在はユーノと結婚し、息子の佑希を授かる。

夫婦共に仲が良く、新婚ホヤホヤの光景をみせるため、世間では『ラブラブフィールド』と呼ばれ、大量のコーヒーやゴーヤの完売が激しいのは、この二人が必ずいる場所に限られている。

能力の『屈服の心』【レイジングハート】^{アクセラレータ}は、高ランクの特殊能力^{アビリティ}の中では、『一方通行』に次ぐ最強クラスに入るが、本編では未使用である。

柴馬アトリ

年齢.. 16歳

能力.. 髪刃^{ヘアブレード}

階級.. Aランク

詳細.. 万時屋でバイトしている高校生。

抜群のプロポーションを持つため、男子に人気であるが、かなりの食欲を持つ。

自らの髪から剣を取り出し、攻撃が出来る。

インデックス

年齢.. ??歳

能力..瞬間記憶能力

階級..Sランク

詳細..あらゆる知識を持ち、一度憶え出来事を忘れない能力を持つ。

身長は、目線が上条の肩が見える位置までである。

シスターであるが、かなりの大食い。

不機嫌になると、上条の頭をかじる癖がある。

御坂美琴／仮面ライダージョーカー

年齢..16歳

能力..超電磁砲
レールガン

階級..Sランク

詳細..常盤台中学出身の高校生。

外見は母親の美鈴に似てきて、胸のコンプレックスも解消されてる。
能力である十八番『超電磁砲^{レールガン}』は最強の武器であり、変身無しでも十分に戦える。

上条に好意を寄せるが、当の本人が鈍感であるため、中々伝わらない。

しかし、彼が背負っている『痛み』を背負いたいと決心している。

一方通行^{アクセアラレータ}／仮面ライダーエターナル・ブルーフレア

年齢…??歳

能力…一方通行^{アクセアラレータ}

階級…Sランク

詳細…最強ランクの特殊者の中でも第一位の座に着く青年。

脳のダメージもあり、戦闘に制限が出来たが、頭の回転や重火器を

活かした戦闘でそれをカバーしている。

上条に対しては、強い憧れを抱いている。

実はコーヒーマニアで、気に入ったコーヒーを大量買いしている事があるが、飽きると別の銘柄のコーヒーを買い替えることが日課になっている。

浜面仕上／仮面ライダーアクセル

年齢…19歳

能力…不明

階級…Eランク

詳細…政府の特殊チーム『アイテム』の構成員。

『とある魔術の禁書目録』の主人公格の中で唯一、コミカルな場面が多く、時折ツッコミ役に回ることが多い。

周りの状況や相手の能力を分析し、そこから対策を練る戦法を得意とする。

また、乗り物の技術にも長けていて、アクセルのバイクフォーム時のときはその技術を活かした戦法を取る。

とおやまごくら
遠山桜

年齢…15歳

能力…不明

階級…Eランク

登場作品…『しなこいつ』、『竹刀短し恋せよ乙女』

詳細…日常篇・第四話に登場する少女。

剣術道場『猪口道場』の門下生。

高校一年で、短剣道の使い手。

超人的脚力から『跳ね馬サクラ』の異名を持つ。

野球が好きで、中日ドラゴンズのファン。

浦原喜助
うらはら きすけ

年齢…不明

能力…不明

階級…不明

詳細…駄菓子屋『浦原商店』の店長で、上条達にメモリとドライバ
ーを託した張本人。

あらゆる技術で特殊なメモリ対応武器を開発したり、怪人絡みの情
報を提供する。

既に飄々した性格であるため、表裏が読めない。

曰く「話してるだけでムカつく」程である。

衛宮士朗／仮面ライダーオーズ

年齢…20歳

階級…Dランク

設定…実家の土蔵で発見したオーズドライバー及びコアメダルを手にした事によって、グリードとヤミーとの戦い人の欲望の深さを体験する事になる。

幼い頃の自分を救ってくれた恩人である養父のような人間になるために、災害ボランティアに精を費やしている。

アंकとは彼の願いを叶える条件として“人命を優先”させている。

能力のランクはDであるが、彼の覚悟の強さでSに跳ね上がる事もある

高町家の剣術『小太刀御神二刀流』を教わっているため、双剣を使った攻撃は得意。

オーズに変身した時も、「二刀流が使える」という理由でカマキリアームを好んで使用する。

セイバー

年齢.. 20歳（外見上）

能力.. インビジブル 不思議、エア・ストライク 風王結界

階級.. A

設定.. 士朗のパートナー。

真面目な性格であるため融通利かないこともある。

食欲はインデックスやアトリに勝るも劣らない胃袋を持つ。

剣術の腕も高く、士朗の鍛錬の相手にもなることもある。

第3. 5話：Rの説明／データ紹介（後書き）

次回は本編に戻ります。

第4話：現るM／跳ね馬美少女剣士、見参（前書き）

見合いでトンでも無い事に!?

第4話：現るM／跳ね馬美少女剣士、見参

見合いをする事になったはやて。

そんな彼女の相手は、真選組監察官の山崎退であった。

しかもその山崎は、はやての好きな男性でもあったのだ。

果たして、はやては見合いを成功できるのか!?

―現るM／跳ね馬美少女剣士、見参―

隣の部屋からカメラを通してその様子を見ていた上条とアラタ。

「とうか当麻、何で俺達が監視カメラを見ながら仲間の行動を監視せにゃならんのだ？」

「だからアラタ、聞くな」

そう言っ上条とアラタはモニターに目を向ける。

すると、山崎がこう言い出したのだ。

『あ、あの……もうすぐ茶菓子来るんで、お茶でも淹れましょうか？』

『あ、はい。すみません／＼／＼』

山崎はお茶を淹れようと立ち上がるが、

『失礼します』

そう言って仲居が現れる。

『山崎様、ご注文の品をどうぞ』

『あ、すみません』

仲居は山崎に、彼から頼まれた物を渡す。

『“ヤ○ザキ食品”のアンパンです』

「「ガフンッ!？」」

それを聞いた上条とアラタは、ずっこけてしまい…

「何故に“ヤ○ザキ食品”のアンパンンンンンンンンンンンン!？」

「ただ単に『ヤ○ザキ』繋がりなだけだろ！」

聞こえているわけでも無いのに、見事なツツコミを放つ上条とアラタ。

「——ったく、ありえねえって」

「大体なんでお茶にアンパンなんだよ？ 普通はお茶なら煎餅で、アンパンは牛乳だろうが」

この時、二人は心の中でこう思った。

「「心配だ……」」

そんな二人は、アンパンを食しながらお茶を飲んだ。

「どうです、このアンパン？」

「メツチャクチャ美味しいです」

以外好評が良く、はやても気に入ったようである。

すると、はやては小さな箱を取り出し……

「あ……あ……あ……あの、よ、宜しかったら………」

中に入っていた肉じゃがを山崎に見せた。

「これ、食べてみてください。作ったんですけど……／＼／＼／」

「え!?! は、はい」

そう言って山崎は、肉じゃがを食したのだった。

「――って、お前も準備してたんかイイイイイイイイ!?!」

準備をしていたはやてに、ツツコミを炸裂させた上条とアラタ。

「じゃ、俺等の出番が完全に無くな!?!」

「もうこのまま終わっても良いんじゃないか!?!」

ツツコミどころが多すぎて、ツツコまずにはられない二人。

『お、美味しいです!』

「しかも違和感無く、普通に食いおったよこの人おおおおお
お!？」

『ホンマか! 良かった／＼／＼／』

「何顔赤らめてるんだよ! 俺達の一日返せこの狸イイイイイイ!
!」

肉じゃがを食べて、嬉しそうに感想を述べる山崎に、はやては嬉し
そうに顔を赤くする。

この時、二人はこう思った。

「「早くこの話終われエエエエエエエエエエ!」」

とても良い雰囲気を見せる山崎とはやてであったが、

【マンティス】

突如、乱入者が現れた。

「シャアアアアアアアア！」

「「!？」」

姿はカマキリを模した怪人。

「真選組監察官・山崎退、そして神都警視庁警視・八神はやて。貴様等を抹殺しに来た」

怪人：マンティスドーパントは、両手の鎌を構えながら二人に襲い掛かった。

「ドーパント!？」

「まさか、こんな所で!？」

映像を観ていた二人は即座に立ち上がり、ドライバーを装着した。

ただ違うのは、上条もロストドライバーを装着していた事であった。

「お前も単独変身!？」

「ああ。 良く見てなよ」

ロストドライバーを付けた上条に驚くアラタ。

「行くぜ」

【JOKER】

「フッ、そうだな」

【SKULL】

「変身!」

【SKULL】

ドライバーのスロットを倒し、アラタは仮面ライダースカルに変身する。

【JOKER】

そして上条は、仮面ライダージョーカー・ツヴァイ（以下ジョーカ

「?」に変身するが…

「——って、何じゃこりゃアアアアアアア!？」

その姿は、ファングジョーカーに酷似していた。

流石の本人も、この姿には驚いている。

「当麻、それジョーカーか!？」

「み……みたいだ」

この姿こそ、仮面ライダージョーカー?の完全形態である。

「(あんの下駄帽子……人のメモリに何か細工しやがったな)」

ジョーカー?はそう思いながら、スカルと共にはやて達の元へ向かった。

「シャアアアアアアア！」

マンティスドーパントは、鎌を大きく振るいながら二人を襲う。

「ウオツ！」

山崎とはやては、その攻撃をギリギリまで避けて外へ出ようとする。

しかし、マンティスドーパントは大きく跳び上がり、二人に刃を向けようとした。

だが、その時であつた。

「ガァ！」

突如弾丸らしきモノが二人の間を通り抜け、マンティスドーパントはそれを喰らって吹き飛ばされてしまう。

「え？」

「今のって……」

「後は俺達に任せろ」

啞然とする山崎とはやてに、ジョーカー？とマグナムを構えたスカルが現れる。

二人はすぐさま逃げ出し、それを確認したジョーカー？とスカルは、

「二人の見合いを邪魔した罪は重えぞ？」

「行くぜ、カマキリ野郎」

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

マンティースドーパントに立ち向かった。

山崎とはやては、難を逃れることが出来たが……

【MASQUERADE】

今度はマスカレイド軍に襲われてしまう。

「な!?!」

銃やナイフ、さらにはヌンチャクまで所持していたマスカレイド軍。

しかし、そこに誰かがやって来た。

「大勢で少人数を襲うなんて……」

その人物は、懷から獲物を取り出し、

「失礼だよ！」

マスカレイドの一人を一撃で倒す。

その外見は、ピンク色の長い髪に青い瞳を持つ学生服姿の少女であった。

「此処は任せて！」

「あ、ありがとう」

「恩に着るで」

彼女は二人を逃がし、他のマスカレイド軍に獲物を構えた。

その獲物は、長さが脇差しに近い長さの竹刀で、彼女はそれを当たり前のように構える。

「猪口道場門下生・遠山桜とおやまのくぐら、参る！」

そう言って少女・遠山桜は、超人的跳躍力で懷に飛び込み、マスカレイド軍の一人ひとりに一撃を与える。

「言っとくけど、女だと思って相手したら——」

再び懷に飛び込んだ桜は、

「失礼だよ！」

マスカレイド軍を短竹刀で叩き伏せた。

マントイストドーパントと交戦中のジョーカー？とスカル。

「シャアアアアアア！」

大鎌を振るいだすマントイストドーパントであったが、

「オラァ！」

「ハッ！」

ジョーカー？に弾かれ、その隙をスカルに狙われてしまう。

「があ！」

吹き飛ばされるマンティースドーパントに、ジョーカー？がそのまま一撃を叩き込む。

「オラァ！」

「ぐお！」

「コイツで決まりだ！」

一瞬の隙を見逃さなかった二人は、メモリをスロットに差し込んだ。

【SKULL MAXIMUM DRIVE】

【JOKER MAXIMUM DRIVE】

ジョーカーは右手から、スカルは専用のナイフ型武器『スカルエッジ』の刃から紫色のエネルギーを纏わせ、

「「ライダーツインマキシマム！」」

拳による打撃とナイフによる斬撃を同時に叩き込んだ。

「グアアアアアアアアアアア！」

二人の技を同時に受けたマンティースドーパントは爆発し、元の男の姿に戻ったのであった。

後の事を警察に任せた二人は、機材を片付けて、その場を去った。
すると、門の前で待っていた人物がいた。

「よう、遠山」

「遅いよ当麻君」

桜と合流した二人は、事務所に帰っていった。

「――で、この子誰？」

「ああ…そーいと言ってなかったっけ？」

『この世界』での生活が浅いアラタにとって、桜は事実上の初対面

である。

「ウチの事務所でバイトすることになった遠山桜だ」

「宜しくね、アラタ君」

そう言って桜が手を差し出すと、

「ああ、宜しく」

アラタも手を差し出し、握手をした。

一方、真選組屯所では…

「えー、皆知ってると思うが……今日の件で、ウチの山崎と警視庁の八神殿が見合いを通して付き合うこととなった。だから今夜は、祝したいと思う……」

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

ルイージ

「何かお母さんが若い人って多いよね」

ネス

「そうですね」

アंक

「色々謎な所だよな」

ウヴァ

「なのはに質問だ『上条の母親と御坂の母親を見て自分の母親が並ぶとどう言う風に見える?』」

カザリ

「(ウヴァ:それ、1歩間違えたらフルボッコじゃない;) : 質問だけど『今回ののはやて×山崎のカップリングは前々から考えてたの?』」

ネス

「上条さんが好きな人たちに質問『上条さんのお母さんに挨拶に行くのは何時?』」

リュカ

「それ、やばくない」

「ベベベベ別にそのような話は／／／／」

御坂

「わわわわわわ私も、そんな気はサラサラ無いし／／／／／」

武田軍兵士 清坂 剣麻さん

こちらでも感想、と言うか質問。

以下の者たちの年齢を見てどう思いますか。（見た目の参照はムゲフロで）

1. 小牟（765歳の仙狐で見た目は小さいエクセレン（スパロボっぽい感じ）通称…駄狐、腐女狐、ダ・フォックス

2. ネージュ・ハウゼン（117歳のエルフ）

3. 鈴華姫（年齢不詳の式鬼）

4. エイゼル・グラナータ（見た目厳つい骸骨）

上条

「いや、だから誰ソレ!？」

第4話：現るM／跳ね馬美少女剣士、見参（後書き）

次回は、いちごムースさんのコラボです。

第1話：武装探偵O／新たなる訪問者（前書き）

いちごムースさんとのコラボです。

第1話：武装探偵O／新たなる訪問者

俺の名は遠山キンジ。

東京武偵高校の2年生。

俺は同じ武偵の神崎・H・アリア、レキ、星枷白雪、峰理子、矢車双、明智正太郎、小林陽、後藤信太郎、アンの計9人の仲間たちと一緒に、食堂へ向かう途中であった。

しかし突如、謎のオーロラが俺達に向かって来て……

―武装探偵O／新たなる訪問者―

とある空港。

此処に、三人の男女がいた。

「久しぶりだな」

「そうですね」

「そうね」

衛宮士郎とセイバー、そしてガラの三人が日本へ帰国した。

「運転手さん、神都までお願いします」

タクシーに乗った三人は、そのまま空港を後にし、神都へと向かった。

「久しぶりの日本ですから、お寿司が食べたいですね」

「いきなり食の事か……確かに早めに何か食べないとな………」

士郎はそう言って苦笑してしまう。

謎のオーロラに入った俺達10人は、

「こ……此処は何処だ!？」

突如謎の街にいたのだった。

「アंक、これって一体」

「どうやら俺達は、別世界に来たようだな」

そう言ってアंकは、辺りを見渡していた。

「相棒、どうする?」

矢車の問いに、俺はすぐさまこう言い出した。

「兎に角、この街の事について調べないと………」

すると、一人の白い服の男が現れた。

「どうやら、『実験』は、成功したようだな」

一人がそう言うと、俺達の前に現れた。

「悪いが、貴様等には来て貰うぞ？」

「フザケンじゃないわよ！ イキナリ初対面からそんなこと言われて「はい、そうですか」って言える？」

男の言葉にアリアが反論すると、

「では、力尽くで来て貰おう」

そう言って男は、懷からメモリを取り出し、

【マスカレイド】

それを体に差し込み、マスカレイドドーパントに変身した。

「マスカレイドドーパント！？」

驚く俺たちであったが、仮面戦士科の俺と矢車と正太郎と後藤はドライバーを装着し、陽の腰にも正太郎と同じドライバーが装着される。

俺はドライバーにメダルを嵌め、矢車はホッパーゼクター、正太郎と陽はメモリを構え、後藤はセルメダルを構える。

【CYCLONE】

【JOKER】

「「「「変身!」」」」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

【HENSHIN CHANGE KICK HOPPER】

【CYCLONE・JOKER】

俺は仮面ライダーオーズ、矢車はキックホッパー、正太郎と陽はW、そして後藤はバースに変身した。

「フン、無駄なことを」

マスカレイドドーパントはそう言って構えていた。

強力なドーパントなら兎も角、マスカレイドドーパント一人なら大勢でもなくとも勝てると思っていた。

しかし、結果は違った。

「グァ！」

「相棒！」

今まで戦ってきたドーパントよりも、このマスカレイドドーパントは強かった。

「この程度か？」

「クッ、クロックア——」

キックホッパーはクロックアップを使おうとした瞬間、

「無駄だ」

「な！？」

一瞬で懐に入ったマスカレイドドーパントは、そのままキックホッパーを蹴り飛ばした。

「グワッ！」

「矢車！！」

「デメエエエエ！」

Wが怒りの一撃を叩き込もうとすると、

「何処を見ている？」

「な!？」

そのままWを吹き飛ばしたマスカレイドにバースはバスターの引き金を引くが、

【セルバースト】

「フン」

弾丸を素手で弾いた。

「バカな!？」

「ウソでしょ!？」 マスカレイドって、戦闘員クラスじゃなかったの!？」

アリアの言葉を聞いたマスカレイドドーパント。

確かに、武偵の教科書にも“戦闘員”という項目にマスカレイドドーパントも入っている。

「フン。 ガイアメモリの使い方次第では、強力なメモリになるということだ」

そう言ってマスカレイドドーパントは銃を懐から取り出し、

「来て貰おうか？ 嫌なら此処で死ね」

アリアに銃口を向け、引き金を引こうとした。

しかし、その時であった。

「ハアアアア！」

「!？」

突如上空から一人の人物が、マスカレイドドーパントに一撃を叩き込んだ。

「……………貴様」

しかしヤツは、難なくその攻撃をかわしていた。

「イキナリのドーパントと出くわすとは……………」

俺はその人物を見て、驚きを隠せなかった。

髪は金髪で後ろに纏めていて、青を基調としたドレスに銀色の鎧を纏った少女が立っていた。

「（この子……………何かジャンヌとキャラが被ってないか？）」

俺はついそう思いながら、その凛々しい姿を眺めていた。

「セイバー！」

すると、彼女の背後から俺より少し年上くらいの青年が走ってきた。

「シロウ、ドーパントです。それもかなり手錬の！」

「分かった！」

その瞬間、彼は走りながらベルトに“メダルを嵌め”、それをスキヤンした。

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

そして彼は、鷹の赤い装甲に虎の黄色い腕、そして飛蝗の緑色の脚部が特徴の戦士へと変わった。

「うそ……あれって……」

「キンちゃんと同じ……」

「オーズ!?!」

理子、白雪、そしてアリアの順で、三人は驚きで声が出てしまう。

まさか、俺と同じオーズが現れるなんて、思ってもいなかった。

彼は一体、何者なのだろうか…

「ハアアアアアア！」

オーズはマスカレドドーパントと互角に渡り合っていた。

俺達武偵の仮面戦士が掛かっても勝てなかったアイツと、互角の強さであった。

「セイヤア！」

バッタレッグによる跳び蹴りで、一撃を放った後、

【タカ・カマキリ・チーター】

メダルチェンジで、亜種のタカキリターにチェンジし、

「ハアアアアアア………」

チーターレッグの高速移動から繰り出すカマキリソードの斬撃が、

「セイヤアアアアア！」

マスカレイドにダメージを与え、マスカレイドドーパントはその場で爆発した。

信じられねえ、俺達でも敵わなかったあのマスカレイドドーパントを亜種のみで倒すなんて……

「……………」

しかしオーズは、カマキリソードを構えていた。

「以外に頑丈だな」

煙が晴れると同時に、先程の男が姿を見せた。

それも無傷で……

「成程、中々の強さだな欲望王^{オーズ}」

「それは、褒め言葉か？」

変身を解いた青年の問いに、男はこう言った。

「一応はな。 いずれ我々は、お前達と戦うことになるかもな」

「……………」

「俺の名は『財団X』の幹部、ウルキオラ・シファール。 此処は退いておくでしょう」

そう言って男……ウルキオラは車に乗り、その場を後にした。

一体、奴等の目的は？

そして、奴等の言っていた『実験』と俺達の関係は……

全てが謎に包まれていた。

く教えて、上条先生く

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

マリオ

「今回はコラボだな」

ネス

「初々しいね」

リュカ

「ネス；」

ルイージ

「それでそれで近藤さん；」

ウヅア

「質問だ『スバル達は出番あるのか？』」

ネス

「質問『作者が書いてるオーズの小説でギルが美少女で霧島 翔子
さんな性格でアंकLOVEな感じにしてるんですけど…こんなギル

はどう思いますか？』」

リュカ

「内の小説関連質問；」

カザリ

「質問だよ『他にもなんとなく異色のカップリングが出てくる？』」

次回を待ってます！

く質問？く

上条

「出ません」

く質問？く

上条

「正直に言おうと………ヘタレ？」

く質問？く

虎龍

「まだ、考えてません」

上条

「予定はあるんだ」

武田軍兵士 清坂 剣麻

ゴリラ羽目外しすぎだろー！ーッ！ー！！

では上条当麻に質問。 次の内、耐えきれると思えるのはどれですか。

1. ライトニングプラスマ（聖闘士星矢）
2. 超級霸王電影彈
3. ライダーダブルキック（仮面ライダー1号、2号による）
4. 無明神風流殺人剣奥義『白虎』
5. 飛龍昇天波＋猛虎落地勢（ただの土下座）

上条

「5で。 土下座だから」

第1話：武装探偵O／新たなる訪問者（後書き）

いちごムースさん、コラボ有難う御座いました。

第2話：武装探偵O／自己紹介と電話と銀髮生徒会長（前書き）

新たな敵が出現

第2話：武装探偵O／自己紹介と電話と銀髪生徒会長

仮面ライダーW Another World Returns
、前回の三つの出来事。

一つ：別世界の住民・遠山キンジ達が、神都に来てしまう。

二つ：キンジ達謎の男に襲撃される。

三つ：士郎が再びオーズへと変身した。

―武装探偵O／自己紹介と電話と銀髪生徒会長―

もう一人のオーズ：衛宮士郎さんの助けられた俺達は、彼の家で手当を受けることになった。

「セイバー。俺は少し席を外すから、後を頼む」

「分かりました」

そう言って金髪の少女・セイバーさんに後を任せた士郎さんは、その場を後にした。

「さて、コレで手当は済みました。少しユックリすると良いですよ」

そう言ってセイバーさんは、テーブルの上の煎餅を口にする。

「（それにしてもこの人……ホントにジャンヌとキャラが被ってるな……）」

俺はそう思いながら、彼女の服装を眺めていた。

先程の青いドレスと鎧ではなく、白いブラウスに青いロングスカート姿になっていた。

そんな彼女は、お茶を飲みながら煎餅を食していて、

「（思いつき日本の風習が身に付いてるな……）」

俺はそう思いながら、彼女がお茶を飲みながらユックリしていた。

「ふう……………」

キンジ達が衛宮邸で手当を受けていた同時刻、

「スゲェ！ ホントに綺麗に直ってるぜ！」

上条当麻は、嬉しそうな顔でハードボイルダーを眺めていた。

「どうッスか、この修理度？」

実はハードボイルダーの調子が悪くなったため、上条は浦原に修理を頼んでいたのだった。

「サンキューな、浦原さん」

上条はそう言って、バイクを走らせた。

上条が立ち去った後、タイミング良く電話が鳴り出した。

受話器を取った浦原は、すぐさま耳に当てた。

「はい、此方浦原商店で御座います♪」

『あ、浦原さん?』

電話の相手は、衛宮士郎であつた。

「おやあ、衛宮さん。 お久しぶりッス」

『暫らくですね』

「もしかして、今は日本ですか?」

『はい、束の間の休暇みたいなもので……』

「それで、今日はどういった理由で?」

『実は、聞きたい事があって……』

「はい?」

士郎の言葉に、浦原は耳を傾けたのであつた。

バイクを走らせていた上条であつたが、

「ん？」

突如、いかにも怪しいトラックが止まっていたため、

「何だ、アリヤ？」

すぐさまそれを追い駆けた。

トラックは人気が無いことを確認したのか、スピード違反と言っても可笑しくない速度で走り出した。

「クッ！」

それを見た上条も、速度を上げて追いかけた。

「おい、そこのトラック待ちやがれ！」

逃走劇から15分後、トラックが突然止まった。

「……………」

トラックから降りた謎の白いスーツ姿の男たち。

それを見た上条は、すぐにダブルドライバーを装着した。

「ヤッパリ財団Xかよ……相棒」

【JOKER】

事務所にいるユーノもサイクロンメモリを構える

【CYCLONE】

「変身！」

【CYCLONE・JOKER】

サイクロンメモリとジョーカーメモリを差し込んだスロットを倒し、上条は仮面ライダーWへと変身した。

「さあ、お前の罪を数えろ」

「財団X……懐かしい名前ッスね」

『懐かしい?』

浦原の言葉に、士郎は疑問を感じ取った。

「財団Xとは、ガイアメモリだけでなく、コアメダル、アストロス
イッチ……様々なシステムを使い、それを人々に売りつける存在。」

言わば『不吉の商人』ですね」

『不吉の商人?』

「ええ……以前上条さんは『サーヴァントメモリ事件』を調べた
ことで、あの『ダーク』を立ち上げた事が判明されました」

『な!?!』

「今でも彼らは、新たな商売を行うために『実験』を行っているは
ずです」

『当麻は、既に動いてるんですか?』

「ええ。なんせ財団Xは、目的のためなら手段は選ばない組織で
すから………」

『分かった。　アリガト、浦原さん』

そう言って士郎は、電話を切ったのであった。

電話を切り、すぐさま外へ向かう士郎。

「シロウ、何処へ!？」

「セイバー。　今から外に行く、一緒に来てくれ」

「はい!」

二人は外へ出るが、ガラが呼び止めた。

「士郎君!」

ガラは自分のコアメダルを三枚投げ渡し、士郎はそれを受け止めた。

「行ってらっしゃい！」

「ああ、行ってくる」

「待っていて下さい！」

士郎とセイバーは屋敷を去った後、ガラはキンジ達のいる茶の間へと向かう。

「とりあえず、出前でも取ろうか――」

しかし、そこにはキンジ達の姿は無かった。

「――って居ねえエエエエエエエエエエ！？」
逃げられた！！」

これには、流石のガラも驚いてしまう。

グリードでも、リアクションが出来るんですね。

衛宮さんの屋敷を抜け出した俺達は、現在街を走り出した。

「おいアリア、良かったのか？ 勝手に部屋を抜け出して……………」

「何言ってるのよ！ あの白服に文句の一つくらい言ってやんないと気が済まないのよ！」

「いや、流石にそれは無理だろう？」

だが、その時であった。

俺達の前に、マスカレイドドーパントの軍団がいた。

「クソッ！」

「フフフフ……此処から先は行かせん」

「此処で死ぬが良い」

武器を手に持ち、構えてくるマスカレイド軍であったが、

「待て！」

そこに、五人の男女が現れた。

「波亜怒雲^{パードウン}高校生徒会長・美剣散々^{みつるぎ}（ちるちる）！」

長い銀髪をポニールにした青年（というか女性？）が、謎のポーズを取り、

「同じく、副会長の中二階堂三一^{なかにかいどう さぶいち}！」

短い黒髪に眼鏡を掛けた青年が、銀髪の人物の右でポーズを取り、

「同じく、書記の姫宮京^{ひめみやまよこ}！」

長い茶髪の少女が銀髪の人物の左側でポーズを取り、

「……………会計の緑川青羽^{みどりかわあおば}」

「……………妻先ドリル」

いたって普通の青年が呆れ、赤いツインテールの少女がたこ焼きを食べながら眺めていた。

「我等は、人々の平和のために戦う………」

「「バードウン波亜怒雲高校生徒会!!」」

何か、ワケの分からない連中が現れたけど、もしかして味方なのか？

「会長。いくら初登場だからって、此処まで派手にすることないと思いますよ?」

先ほどの普通っぽい感じの青年・緑川はそう言ってツツコミを放った。

一番大変そうな人を見つけた気がする。

「そう言うな会計よ。変身するぞ」

「え、イキナリ!?!」

そう言って銀髪の人物・美剣散々の手には、赤いカブト虫が握られていた。

「アレはまさか!?!」

それを見た俺達は、それがカブトゼクターである事に気付き、美剣散々はそれをベルトに装着した。

「変身!」

【H E B S H I N】

その瞬間、美剣の姿が銀色の装甲に覆われ、

「キャストオフ」

【C A S T O F F】

更に、カブトゼクターの角をレバーのように右に倒し、

【C H A N G E B E E T L E】

装甲が吹き飛び、そこからカブト虫の角が特徴の赤い装甲の戦士へと変わった。

『太陽を支配し太陽の神』の異名を持つ戦士・仮面ライダーカブトが、俺達の前に現れたのだった。

カブトはクナイガンを構え、マスカレイド軍の方へ走り出す。

「クロックアップ！」

【C U L C K U P】

さらにそのままクロックアップを使い、一瞬にして消えた。

否、移動したのだ。

クナイモードのクナイガンを振るい、マスカレイド達を一掃するカブト。

すると、茶髪の少女・姫宮京が、刀のような武器を手を持ち、

「美剣様、私も参ります！」

そう言って紫色の蠍のゼクターを剣に装着した。

「変身！」

【H E B S H I N】

「キャストオフ！」

【C A S T O F F】

紫の装甲に蠍の鋏を模した緑の複眼の戦士・仮面ライダーサソードが此処に参上した。

「うっしやあー！ 俺も行くぜ！！」

さらに眼鏡の青年・中二階堂三二も右腕のブレスレッドにスズメバチを模したゼクターを装着する。

「変身！」

【H E B S H I N】

さらにそのまま針の部分を上に向けるように回し、

「キャストオフ！」

【C A S T O F F】

蜂の巣を模した装甲が飛び、

【C H A N G E W A S P】

そこにスズメバチを模した仮面とボディの戦士・仮面ライダーザビーが参上した。

「僕も行きます！ 変身！！」

至って普通の青年・緑川青羽は、クワガタムシを模したゼクターをベルトに装着し、

【HEBSHIN】

「キャストオフ！」

【CAST OFF】

肩にバルカンキャノンが付属された装甲が飛び、

【CHANGE STAG BEETLE】

『戦いの神』と呼ばれし青き戦士・仮面ライダーガタックが参上した。

そしてツインテールの少女・妻先ドリルも、

「……………変身」

【HEBSHIN】

緑色の飛蝗型ゼクターを装着し、

【CHANGE KICK HOPPER】

飛蝗を模した緑色の戦士・仮面ライダーキックホッパーへと変身した。

「此処は我々に任せて、君達は先に行け！」

「ああ。助かった！」

カブトの言葉に、キンジ達は先へと進んだ。

同時刻、マスカレイド軍と戦う仮面ライダーW。

相手は二人とは言えど、財団Xの幹部はエリート中のエリート。
簡単には倒れてくれる程の甘い相手ではない。

「ハッ！」

Wはマスカレイドを二人相手にするため、相当な苦戦となる。

「流石に二対一はきつくねえか！」

「正確には、二対二だけどね」

上条の文句にツツコミを入れるユーノ。

するとWは、ソウルサイドをルナメモリに差し替える。

【LUNAR】

【LUNAR・JOKER】

幻想の切り札・ルナジョーカーにチェンジし、

「一気に決めてやるぜ！」

【JOKER MAXIMUM DRIVE】

ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ瞬間、Wは二つに分裂し、

「ハアッ！」

ルナサイドが五人に分身して、一斉に腕を伸ばしながら攻撃をした後、

「「ジョーカーストレージ!!」」

「「グワアアアアアアアア！」」

ジョーカーサイドの手刀が決まり、マスカレイドは二人共に消滅した。

元の一つに戻ったWは、トラックの中を確認する。

「ヤロオ………何運んでたんだ？」

そう思いながらその中を見る。

「な、何だよこれ！？」

そこでWが見たものとは！？

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

A アンク「ヘタレじゃねえよ!! すっごく積極的に俺を狙ってる!」

A ギル「…好きだから」

ネス「メガマックスみたいな展開だね」

マリオ「確かに近いな」

ソニック「さて、どうなるんだろうな？」

リンク「質問です『オーズの方でオリジナルのコンボを考えてますか?』」

スネーク「作者に質問『好きなキャラは?』」

リュカ「アラタさんに質問です『こっちでの上条さんと出会った時どう思いました?』」

＼質問？＼

虎龍

「一応考えてます」

＼質問？＼

虎龍

「上条さん、改蔵、美剣さん」

＼質問？＼

アラタ

「まさか、あの当麻が18歳になると結構大人びた感じになるんだと分かったし、こっちだと美琴がジョーカーに変身したって言うのが分かった」

第2話：武装探偵O／自己紹介と電話と銀髮生徒会長（後書き）

続きをお楽しみに。

第3話：武装探偵O／幹部と悪魔と妖怪コンボ（前書き）

オーズにオリジナルコンボが！

第3話：武装探偵O／幹部と悪魔と妖怪コンボ

仮面ライダーW Another World Returns
、前回の三つの出来事。

一つ：士郎は浦原から、財団Xの情報を聞かされる。

二つ：カブトが参戦する。

三つ：Wは、財団Xのトラックから何かを発見する。

―武装探偵O／幹部と悪魔と妖怪コンボ―

士郎とセイバーが向かった先には、一人の男が立っていた。

「また会ったな、欲望王。」

「ウルキオラ……シファ……」

「まさかイキナリ貴方と戦う事になるとは、思いも寄りませんでした」

そう言ってセイバーは剣を構え、士郎はオーズドライバーを構え、

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

仮面ライダーオーズに変身し、戦闘態勢に入った。

するとウルキオラは、懐からガイアメモリを取り出し、

【デビル】

それをコネクタに差し込んだ。

その姿は、西洋の悪魔を思わせるような邪悪な姿であった。

名はデビルドーパント…『悪魔の記憶』を宿し、最凶最悪のドーパント。

「行くぞ！」

跳びかかるオーズに、デビルドーパントは鋭い爪で切り裂く。

「グッ！」

すぐさま攻撃をガードするオーズ。

【タカ・カマキリ・バツタ】

「ハッ！」

カマキリソードを振り回すが、デビルドーパントが翼で攻撃を防いだ。

「な！ 刃が……一ミリも喰い込んでない！？」

「無駄だ」

果たして、オーズはデビルドーパントを倒す事ができるのか！？

ZECTのライダーシステムを使う謎の集団（？）に助けられた俺達の前に、再び新たな敵が現れた。

「こいつ等か……『実験』のモルモットってヤツア？」

そう言っただけの前に、昼間のウルキオラというヤツと同じ白を貴重にしたようなスーツ姿の男が現れた。

薄い水色の髪に上半身が裸、さらにその上から裾の短い上着を羽織った不良のような姿だった。

「財団Xの幹部……グリムジョー・ジャガージャックだ!!」

男：グリムジョーはそう言っただけでメモリを取り出し、

【レオパルト】

コネクタに差し込んだと同時に、その姿が表を模したドーパントへと変わった。

さしずめ、レオパルトドーパントだろう。

「此処でテメエ等は終わりにしてやるよ！」

レオパルトドーパントは、その鋭い眼で俺達を睨んでいた。

「（やはり此処は戦うべきか）」

そう思い、俺はオーズドライバーを手に取りとうとするが、

「此処は任せろ」

「え？」

そこには、白いスーツと帽子を身に付けた俺達と同じくらいの年齢の青年が歩み寄った。

「何だデメエ？」

レオパルトドーパントが問うと、彼はこう答えた。

「俺の名は、鏡祢アラタ」

彼：鏡祢アラタが名を名乗りながら自らの腰にあるモノを装着した。

「アレは!？」

それは何処から見ても、ロストドライバーであった。

【SKULL】

鏡祢はメモリを構えると、帽子を脱ぎだし、

「変身」

【SKULL】

スロットに差し込み、それを横に倒した。

その瞬間鏡柙は、S字型の傷のある骸骨を模した銀色のマスクに黒いボディ、首には白いマフラーを巻いた仮面戦士に変身し、先ほど脱いだ帽子を傷跡を隠すように被った。

「またの名を……仮面ライダースカル」

スカル……その言葉に、俺達は聞き覚えがあった。

世界で始めて装着型の仮面戦士の呼び名で、正太郎と陽のWのモチーフとなった戦士の呼び名でもあった。

「さあ、お前の罪を数えろ」

スカルはそう言って、レオパルトドーパントに向かって走り出した。

「ハッ！」

助走を付けた跳び蹴りを喰らったレオパルトドーパントであったが、蹴られた腹部を押さえながらこう言った。

「ほう、上等じゃねえか。　コレくらいやって貰わなねえと、殺し甲斐がねえからな!!」

その鋭い爪と牙を光らせながら、スカルに襲い掛かる。

一瞬、俺達の方を見たスカルは、

「此処は任せろ、早く行け」

そう言ってレオパルトドーパントと対峙した。

彼の気持ちを無駄にはしないと、俺達は走り出した。

ウルキオラを倒すために。

その同時刻、仮面ライダーWは…

「こ……コレは!？」

謎の小箱を見つけた。

「まさか……この箱を運ぶために、こんなデカイトラックを走らせたのか？」

疑問に思いながら、小箱に触れようとした瞬間であった。

ガタガタ……と箱が震えだしたのだった。

「ウオッ！ 何だ!？」

突然の出来事に、驚きを隠せないWであったが、

「まさか……何か、入ってんのか？」

「それ以外、何があるのかい？」

ビビる上条に、ツツコミを入れるユーノ。

しかし、その時であった。

ドゥーンと箱が飛び出し、

「うお!？」

そのまま飛び去ったのであった。

「な……何だったんだ？」

「いや、僕に聞かれても……」

キンジ達を先へ行かせたスカルは、レオパルトドーパントと激突を繰り返していたのだった。

「ハッ！」

「おっと！」

「オラァ！」

「ハァ！」

拳と拳が交じり合い、二人は互角の強さを見せる。

一端距離を取った二人であったが、

「ハァ……ハァ……やるじゃねえか。だが、そろそろ体力が限界じゃねえのか？」

「ハァ……ハァ……それはお互い様だろう？」

そう言って二人は、再び激突するのであった。

デビルドーパントの圧倒的な戦闘力に、完全に押されてしまうオーズ。

「クッ！」

「無駄だ。俺と貴様では、既に勝負は見えている」

そう言ってデビルドーパントは、細長い尾でオーズの首を巻きつけながら持ち上げる。

「グッ……」

「終わりだ」

「シロウ！」

絶対絶命となったオーズであったが、

「うおおおおおお！ 変身！！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

駆けつけたキンジの変身したオーズ・タトバコンボの攻撃で、そのまま吹き飛ばされたデビルドーパント。

「衛宮さん。 大丈夫ですか」

「その声……遠山か？」

ボロボロの体を立ち上がらせた士郎。

「ああ。 あの野郎に昼間の借りでも返そうと思ってな」

「よし、それじゃ行くか！」

そう言って二人のオーズが、立ち上がるデビルドーパントと対峙する。

「「変身！」」

【HEBSHIN CHANGE KICK HOPPER】

【CYCLONE・JOKER】

キックホッパーとWとそしてバースが参戦し、戦闘態勢に入った。

俺達は再び戦闘に入り、目の前の敵に目を向ける。

「良いだろう……その五体………塵にしてくれよう」

そう言って、悪魔のような姿のドーパントは構えを取った。

声から察するに、あのウルキオラだと気付いた。

しかし、その時であった。

「ん？」

突如衛宮さんに向かって来るように、何かが出現した。

衛宮さんはすぐさまそれを受け取り、それが何なのかを確認した。

「コレは……………」

それを見た衛宮さんは、それをオーズドライバーに差し込んだ。

どうやらコアメダルだったようで、それをすぐさまスキャンした。

【オニ・ヒヒ・ヌラリヒョン・オ〜ヒ〜・オ〜ヒ〜・ヒョー……
ーン】

その瞬間、衛宮さんが変身したオーズは装甲が真っ黒に染まり、ス
ーツの部分はプティラコンボと同じ白に変わっていた。

二本の角をと赤い複眼が付いた鬼のような頭部に、狒々の如き腕部、
そして滑瓢^{ぬらりひょん}を思わせる脚部。

さらにオーラングサークルは白く、そこに上から鬼・狒々・滑瓢の
絵が描かれていた。

日本妖怪の力を宿す形態、仮面ライダーオーズ・オヒヒョンコンボ
が此処に光臨した。

「（何だ……この威圧感は？）」

デビルドーパントは、衛宮士郎が変身したオーズに表情には出さなかったが、内心は驚いていた。

「（まさか……財団の発掘部隊が入手したという……爬虫類王・ガラですら存在を知らないと言われている……『希少種』のコアメダル）」

しかし、そのメダルが一体何なのかは検討は付いていた。

「コレは……一体？」

新たな姿に、驚きを隠せないオーズであったが、

「行くぞ」

すぐさま戦闘態勢に入っただけであった。

「良いだろう……此处で貴様を消す」

しかし、その時であった。

「な!？」

突如オーズが、デビルドーパントの懷に飛び込み、

「ハア！」

強靱な一撃を叩き込んだ。

「グッ！」

その一撃にデビルドーパントは、吹き飛ばされてしまう。

「ガッ！（何だ、このパワーは！？）」

驚きを隠せなかったデビルドーパントであったが、

「な！？」

再び懐に入ったオーズに驚きを隠せなかった。

「（反応出来なかっただ！？　　どういうー！）」

しかしデビルドーパントは、そのまま顔面を鷲掴みされ、容赦なく投げ飛ばされてしまう。

「グッ！」

体勢を立て直そうとしたデビルドーパントであったが、

【SCANNING CHARGE】

ベルトをスキャンさせたオーズは、口部分から吹き出した炎を拳に纏わせ、

「セイヤアアアアアアアア！」

そのまま両手のパンチを一気に叩き込んだ。

「ガッ！」

吹き飛ばされたデビルドーパントであったが、

「ハア……ハア……良いだろう……此処までだ」

そう言ってデビルドーパントは姿を消したのであった。

一方のスカルは、

「チッ、時間切れか」

「なに？」

レオパルトドーパントの放った一言に疑問を感じ取った。

「此処は退いてやるよ。 次は、容赦ねえぜ」

そう言ってレオパルトドーパントは、そのまま姿を消し去ったのであった。

「一体……奴等の目的は？」

スカルはそう思いながらも、変身を解いたのであった。

戦いの後、浦原商店に向かった一同。

「成程……やはり奴等が絡んでましたか」

浦原は出来るだけ、財団Xの事を伏せながらキンジ達に組織の説明をする。

「つまり、俺達がこの世界に来たのは……」

「ええ。恐らく、彼らにとって何かの『実験』の対象ということですかね」

キンジ達武偵一同は、背筋を凍らせてしまう。

まさか、自分達がこの世界に来てしまったのが、敵側の『実験』である事に理解出来なかったのだ。

「まあ、別に貴方達を元の世界に戻す方法はないわけでもないんですけど」

「あるんですか!？」

キンジ達は、浦原の一言に驚きを隠せなかった。

「勿論ありますが……一つ条件があります」

「条件？」

その一言にキンジ達は疑問を感じ、浦原は意地悪な笑みを見せながらこう言った。

「上条さん達とライダー対決しませんか？」

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

マリオ「カブトも出たな」

ルイージ「他のライダー出そうだね」

ネス「それで上条さんが見た物は……！」

アंक「質問だ『現存のオーズのコンボ（タマシー含む）でそれぞれ合うと思うキャラはいるか？』」

ネス「質問！『全てのコンボが全員登場なお話は考えてますか？』」

カザリ「ガラに質問『今の趣味は？』」

く質問？く

虎龍

「そうですね……一番会うと思うのは、正確的に改蔵はタマシーコンボですかね。士郎はオーズの中ではタジャドルです」

く質問？く

虎龍

「まだ考えていません」

「質問？」

ガラ

「人間観察とインターネット。それから読書にメダル研究かな」

百鬼丸

質問ですが、魔人探偵脳噛ネウロのキャラや、灼眼のシャナのキャラも登場しますか？

次回を楽しみにして待っています。

上条

「そうですね。ネウロは第一部に登場させましたから、今後出す予定です。シャナは原作読んでないので分かりません」

第3話：武装探偵O／幹部と悪魔と妖怪コンボ（後書き）

くオリジナルフォームく

・仮面ライダーオーズ・オヒヒョンコンボ

頭部…オニヘッド

腕部…ヒヒアーム

脚部…ヌラレグ

基本カラー…黒

スーツの色…白

複眼の色…赤

属性…闇

詳細…財団Xの発掘部隊が運んでいた箱に入っていた3種類のコアメダルの内の一種類目で、妖怪の能力を宿している。

無音移動に優れたヌラレグの移動術で懐に入り、専用武器『ヒヒナックル』を付加されたヒヒアームの打撃による接近、そしてオニヘッドの吐き出す炎遠距離が得意。

闇属性のメダルであるため、夜や闇のある場所でその能力は発揮させ、対象の影の中に潜ることも可能である。

影の中に潜れる能力『シャドーアサシン』は、不意打ちにも優れている。

必殺技はオニヘッドから吹き出す炎・鬼炎きえんを纏った両手の拳を同時に叩き込む『獄焰拳ごくえんけん』。

・妖怪系コアメダル

財団Xの発掘部隊が運んでいた箱に入っていた3種類のコアメダルの一つで、ガラですらその存在を知らないほどの存在である。

色は黒。

夜、もしくは闇のある場所でその能力を発揮できる。

・オニヘッド

霊感に優れ、本来見えない存在や物理的接触が不可能な対象を見ることが出来る。

そのため、霊体を見ることが出来たり、その言葉を知る事ができる。

戦闘では、口部分から紫色の炎・鬼炎きえんを放つことが出来る。

外見は仮面ライダー響鬼に複眼を加えた様な姿。

・ヒヒアーム

腕力と握力に優れ、ゴリラアームを超えるパワーを持っている。

両手には、手甲型武器『ヒヒナックル』が装着されており、岩をも砕くことが出来る。

また、オヒヒョンコンボ状態になると、霊体に触れることが出来る。

・ヌラレッジ

無音移動に優れ、一瞬にして相手の懐に移動することが出来る。

また、足音が無いという特徴を持ったため、相手の感覚を狂わせ、認識をずらせる。

第4話：武装探偵O／地下室と4対4と大系コンボ（前書き）

オーズ、新たなオリジナルコンボ！

第4話：武装探偵O／地下室と4対4と犬系コンボ

仮面ライダーW Another World Returns
、前回の三つの出来事。

一つ：グリムジョーを相手にスカルが乱入。

二つ：オーズが新たなコンボを手にする。

三つ：キンジ達は、浦原から勝負を申し込まれた。

―武装探偵O／地下室と4対4と犬系コンボ―

「上条さん達と勝負をしてみませんか？」

浦原さんからそんな事を言われた俺達。

本気で言ってるのか、この人は？

「本気ですよ」

人のモノローグを読んでんじゃねえ！

掴みどころがないな！！

「無論、アタシが装置を作るまでの時間潰しでもしてくださいって
言ってるんですけどね」

それを聞いた俺達は、少し考えた後、

「分かった、俺達は構わないよ」

「んじゃ、地下室にどうぞ」

そう言って浦原さんは、畳の一枚を開くと、そこから長い梯子が掛けられていた。

俺達は浦原商店の地下室に入ったのは良いが、余りにも広すぎる空間に驚きを隠せなかった。

「何だこりゃぁー！ー！ー。この店の地下にこんなデッカイ空間があったなんてえー（棒読み）」

「いや、無理して言わないで良いですよ。これでも十分驚いてますから」

しかし、幾ら何でもこんなに広い空間だとは思わなかったぞ。

というか、広いってレベルじゃねえな!?

「いやあ、この地下を作るのにコッソリ人様の家の地下も使っちゃいましたからね♪」

「完璧にそれ、犯罪じゃねえか！」

てか犯罪のレベルを完全に超えてるだろこの地下は。

「フフフフ……犯罪？　この世に法律で罰せる犯罪はもうありませんよ♪」

「コイツ……話してるだけでムカつくわね」

コメカミの血管が浮き出たアリアは、今でも風穴を開けようとしている。

気持ちちは分かる、俺も同じだ。

「んじゃ、頑張って下さいね♪」

全くペースを崩さずに、浦原さんは地上へと上がって行った。

「あれか？　あの人は客の話を無視して話を進めるタイプなのか？」

俺は本気でそう言ったのだった。

こうして、浦原の提案による神都組と武偵組の『ライダーバトル』が開催された。

「で……誰が行く？」

俺の問いに、矢車が挙手した。

「相棒、俺が行く」

そう言って矢車はホッパーゼクターを手にとった。

「んじゃ、俺が行くよ」

神都側からは衛宮さんが立った。

「それじゃ、始めるか」

「ああ………」

「「変身！」」

【タカ・トラ・バツタ】

【HEBSHIN】

矢車はゼクターをベルトに装着し、衛宮さんはベルトに嵌めたメダルをスキャンし、

【タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

【CHANGE KICK HOPPER】

仮面ライダーキックホッパーと仮面ライダーオーズに変身した。

二人は走り出し、パンチとキックが同時に放たれた。

「ハッ！」

キックホッパーが回し蹴りを叩き込み、

「ウオッ！」

オーズがそれをかわした。

するとオーズは、真ん中のメダルをカマキリコアに差し替えた。

【タカ・カマキリ・バッタ】

腕部をカマキリアームに変えたオーズは、カマキリソードでキックホッパーを切り裂く。

「ハッ！」

衛宮さんはどうやら双剣術に自信があるようで、カマキリソードをまるで自分の手足のように使いこなしていた。

俺の変身するオーズとは、全く違う戦い方だった。

「クッ、やるな。相棒のオーズとは全く違った戦法だな」

「どうも」

するとキックホッパーは、ゼクターの脚部を付け根部分まで動かす。

【RIDER JAMP】

その瞬間、キックホッパーは天高く跳び上がり、

「ライダーキック」

【R I D E R K I C K】

ゼクターの脚部を元の位置に戻した後に、そのまま強力なキックを叩き込んだ。

「!!」

それを見たオーズは、すぐにガードをするが、左足に付属されているアンカージャッキの反動により、吹き飛ばされてしまう。

「ぐわぁ！」

着地したキックホッパーは、再び構えを取る。

「悪いが、この勝負は俺の勝ちだ」

しかし、オーズはすぐさま立ち上がり、三枚のメダルを手取る。

「新しいメダル、試しに使わせて貰うぜ」

そう言ってオーズはそのメダルを差し込み、スキャナーでスキャンした。

【ジャッカル・オオカミ・キツネ・ジャ・オ~~~~ネ】

その瞬間オーズは、^{ジャツカル}胡狼を模した青い複眼の頭部で狼を模した腕部、そして狐を模した脚部の銀色の装甲の戦士に変わった。

俺でも知らないコンボ形態……名はオーズ・ジャオネコンボ。

「ウオオオオオオオオオオ！」

遠吠えに近い雄叫びを上げたオーズ。

その瞬間、地面に亀裂が入り、さらには岩山までが砕けた。

「もしかしてあれって、『音圧』ってヤツか!？」

俺は驚きながらそう思った。

でも、信じられねえ……雄叫びで此処まで地形に影響が出るのか!？

俺はそう思いながら、オーズとキックホッパーの戦いを見ていた。

「何て威力だ。こっちもグラつくところだった」

キックホッパーはそう言いながら構えると、

「ハッ！」

オーズは俊敏さを活かし、キックホッパーに接近した。

「な!？」

驚くキックホッパーであったが、そんな暇を与えないオーズ。

腕部のオオカミアームの指先に付属している武器・オオカミネイルで、キックホッパーを容赦なく切り裂く。

「クッ！」

逆転されたキックホッパーは、すぐさま反撃に入るが、

「ハッ！」

脚部のキツネレッグの装飾・ナインテールが九本のキツネの尻尾に変わり、まるで意志を持った鞭のように攻撃し始めた。

「ぐわ！」

完全な絶対防御に、キックホッパーは手も足も出なかった。

【SCANNING CHARGE】

メダルをスキャンしたオーズは、一度跳び上がると、ナインテールで体を包んだ後、

「セイヤアアアアアアアアアアアアアア！」

強烈なキックを叩き込んだのであった。

「ぐわああああ！」

攻撃を受けたキックホッパーは吹き飛ばされ、強制的に変身が解除された。

変身を解いた衛宮さんは、

「良い勝負だったよ」

そう言って矢車に手を差し伸べた。

それを見た矢車も、その手を取って立ち上がる。

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

ネス

「質問！『ソウル以外にWのオリジナルメモリは出ますか？』」

リンク

「質問です『エターナルやジョーカーはオリジナル強化体を考えてますか？』」

「質問？」

虎龍

「ないです」

「質問？」

虎龍

「まだ考えていません。良い案があったら書いてくれると嬉しいです。ジョーカーは雷系のメモリを使うことは決めています」

上条

「ネタバレ？」

虎龍

「ま、良いじゃない？」

百鬼丸

「2つ質問ですがこの物語に出る破面は人間ですか？それからかつてに改蔵のキャラはいつ出ますか？」

く質問？く

虎龍

「そうです。この物語に出る破面は人間です。ただ財団Xの幹部にするとモロ人間離れしますが……」

く質問？く

虎龍

「次回出す予定です」

上条

「はい、今回は此処までです」

第4話：武装探偵O／地下室と4対4と大系コンボ（後書き）

美剣

「今回は私と改蔵氏のタッグだ！」

改蔵

「ライダーパワー、来たアアアアアアアアア！」

青羽

「此処におバカタッグが生まれた！！！」

第5話：武装探偵O／中二階堂の過去？とタッグ対決と新スイッチ（前書き）

超おバカタッグ参上！

第5話：武装探偵O／中二階堂の過去？とタッグ対決と新スイッチ

仮面ライダーW Another World Returns

、前回の三つの出来事。

一つ：浦原の提案で、模擬戦を行うキンジ達。

二つ：キックホッパーとオーズが戦う。

三つ：オーズが、新しいコンボで勝利を収めた。

―武装探偵O／中二階堂の過去？とタッグ対決と新スイッチ―

オーズの新コンボ発動により、衛宮さんが勝利を収めた。

すると後藤と正太郎が立ち上がり、

「次はタッグ勝負をしないか？」

「どうせだから、そっちの方が面白いだろう？」

それを聞いた美剣さんは、持参していたセンスを広げながら、

「良いだろう！ では私と副会長の中二階堂とタッグをする！！！」

そう言って横の青年・中二階堂さんを指名するが、

「嫌です」

「え？」

突如彼は、会長命令を拒絶した。

嫌って、どういうことだ？

まさかライダー同士の戦いを拒んでいるのか？

確かに、仮面戦士科の中にもそういう人間がいるから、分からなくもないが……

「だって、だって……女ライダーがいねえじゃねえかアアアアアアアアア！」

そう言うことだったんかい！

確かに女性ライダーは余りいないが。

しかし、その光景を見た美剣さんと姫宮さんは、何故か驚愕した顔でこう言った。

「な……中二階堂が！」

「泣いている！？」

そんなに珍しいのか、彼が泣くところが？

「あの中二階堂が……高校生にもなって、女教師を『お母さん』と呼び間違えてしまっても決して泣かなかったあの中二階堂が……」

高校生にもなってそんな間違いしてたのかよ！？

今の小学生でも、そんな絶対ないのに！？

「あの中二階堂さんが……普段の存在感の薄さから、研修バスに乗れずに一人だけ置き去りにされても決して泣かなかったあの中二

階堂さんが……………」

うわ、そんな事があったのかよ、悲しすぎる。

「クラスで出臍とからかわれ、強がって先生の指輪を嵌めたら抜けなくなってしまい、付いたあだ名が『ジュエリーリング』のあの中二階堂が……………」

ま…マジかよ!？

まさか、今でもその指輪が嵌まったままなのか？

「金属探知機を潜るたびにブザーが鳴り、お臍の『ジュエリーリング』を見せることになっても泣かなかったあの中二階堂さんが……………」

当たってた、まだ付いてたんだその指輪！

そりゃ、空港の人は驚くだろうな！

「あの中二階堂が……………」

「あの中二階堂さんが……………」

「泣いている!」

というか、さり気彼の過去を暴露してるような気がしてるんだが……………」

「じゃあ、僕がこの勝負に入ります」

そう言って勝改蔵が立ち上がった。

「そうか、頼むぞ」

「はい！」

四人は位置に着き、ベルトを装着した。

美剣さんはカブトゼクターを手に取り、

「変身！」

【HENSHIN】

ベルトに装着し、

「キャストオフ」

【CAST OFF】

カブトゼクターの角を右に引くと同時に、装甲が弾け飛んだ。

【CHANGE BEETLE】

改蔵は、フォーゼドライバーのスイッチを押し、

【3…2…1…】

「変身！」

【GO!】

最後にレバーを引いた。

「変身」

後藤はセルメダルをベルトの挿入口に入れ、レバーを回した。

【CYCLONE】

【JOKER】

「「変身！」」

正太郎と陽は、メモリを構えた後、陽↓正太郎の順でメモリを差し込み、スロットを倒した。

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーカブト&mp;フォーゼタッグVS仮面ライダーW
&mp;バースタッグの戦いが遂に始まった。

カブトはクナイを構え、Wと対決する。

「行くぜ、陽！」

「ああ。行くよ正太郎」

【LUNAR・TRIGGER】

幻想の狙撃手・ルナトリガーにチェンジし、マグナムから追撃弾を
発射される。

「クロックアップ」

【CULCK UP】

カブトはクロックアップによる音速移動で、それをかわしだす。

【CULCK OVER】

「流石だ。ルナトリガーの追撃弾をかわすなんて」

「だったらパワーで決めるぜ！」

【HEAT・METAL】

するとヒートメタルにチェンジし、シャフトを前方に叩き込む。

ガキーンとカブトはクナイでガードをする。

「やるな」

「フッ……其方こそ」

一方でフォーゼとバースは、

「宇宙、来たアアアアアアアアア」

思いつきり拳を上突き上げたフォーゼ。

そういえば、玄太郎も似たようなことしてたな。

どの世界でも、フォーゼのやる事って同じなのか？

「行くぞ！」

バースはそう言って、メダルを入れる。

【ドリルアーム】

左手からドリルアームを装着したバースは、そのまま突き出すが、

「だったら俺も！」

【ドリル・オン】

フォーゼも左足にドリルのモジュールを召喚し、そのままキックを叩き込んだ。

ドリル同士のぶつかり合い。

此処までやるとは、思いも寄らなかった。

「「ウワァ！」」

しかし、そのまま弾き飛んでしまう。

「こうなったら」

「コイツで！」

【キャタピラレッグ】

【ロケット・オン】

キャタピラレッグを装着したバースとロケットモジュールを装着したフォーゼが、そのまま突進をする。

「ウオオオオオオオオ！」

「ライダーロケットドリルキイイイイイイイイイイイイック！」

二人のドリル攻撃が再びぶつかった。

「行くぜ、」

【METAL MAXIMUM DRIVE】

メタルシャフトのスロットにメモリを差し込んだWは、両端に炎を纏ったシャフトを構え、

「成程、大技で決めるか」

【1……】

そう言ってカブトは、ゼクターのスロットボタンを押し出す。

【2……】

「ハアアアア………」

【3……】

「「メタルブランディング！」」

「ライダー………キック」

カブトゼクターの角を一度倒すと、再び角を元の位置に倒した。

【RIDER KICK】

角から伝わったエネルギーを纏ったカブトの右足と、両端に炎を纏ったメタルシャフトを構えたWの必殺技がぶつかり合い、

「ガッ！」

吹き飛んだのはカブトであった。

「よし、俺達の勝ちだな」

「油断しないで正太郎。 まだ、フォーゼがいるんだ」

そんな会話をするWの横に、

「グッ！」

ボロボロのバースがいた。

「後藤！」

「やはり、フォーゼが強いか」

「何時でも良いぞ！」

そう言ってフォーゼは、左端のスイッチを差し替える。

「ポチっとな！」

【バスター・オン】

するとオーズの左腕から小型の大砲のような武器が出現した。

「うおおおお！ ロックバスターだ！！」

勝手に興奮するオーズに、Wはサイクロンジョーカーにチェンジする。

【CYCLONE・JOKER】

「喰らえ！」

するとフォーゼは、バスターモジュールの標準を合わせて、エネルギー波を放った。

「当たれエエエエ！」

放たれたエネルギー波をすぐさまかわすW。

因みにエネルギー波は、遠くの岩山を跡形もなく吹き飛ばした。

「……………マジで!?!」

「避けて正解だったね」

陽の言うとおりだ。

もし当たったら、マジでWの負けだった。

「面白え、一気に決めるぜ!」

【J O K E R M A X I M U M D R I V E】

マキシマムスロットにメモリを差し込んだWは、竜巻で宙に浮き、

「おっしやあー! 俺も行くぜ!!」

【ロケット・オン】

【ドリル・オン】

【リミットブレイク】

フォーゼもドリルとロケットのモジュールで空を舞う。

「「ジョーカーエクストリーム!」」

「ライダーロケットドリルキイイイイイイイイイイイイイイイイック!」

二人の必殺技が決まり、

「ぐわぁ！」

退き飛ばされたのはフォーゼの方であった。

ライダーバトルも大詰めになり、

「最後は俺か……」

少し緊張気味の俺に、アリアがこう言った。

「キンジ、ちゃんとやらないと——」

「“風穴開ける”だろ？ 分かってる、ちゃんと戦うよ」

そう言って俺は、オーズドライバーを装着する。

「んじゃ、上条さんも行きますか」

そう言って彼…上条当麻もドライバーを装着する。

「（コイツはWか…）」

俺はそう思いながら彼の外見を見る。

オレンジを基調にしたTシャツに黒い革ジャンを羽織った、ツンツン頭の青年。

至って普通の青年にしか見えないが、

「行くぜ」

【JOKER】

「行っておくけど、やり過ぎないように」

そう言って、長い金髪に眼鏡を変えた緑を基調にしたスーツ姿の青年が、メモリを構える。

【CYCLONE】

「「変身！」」

俺もすぐにメダルを差し込み、スキャナーでスキャンした。

【CYCLONE・JOKER】

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

上条当麻は仮面ライダーWに変身し、俺はオーズに変身した。

「教えて、上条先生」

上条

「はい、今日のお便りは下記の通りです」

ネス

「質問！『オーズのオリジナルコンボのそれぞれ選んだ理由はなんですか？』」

リンク

「士郎さんに質問です『自分以外のオーズを見てどう思いますか？』

」
アネク

「質問だ『フォーゼはオリジナルのスイッチを考えてたりするか？』

」
く質問？く

虎龍

「物語をより面白くするためです」

く質問？く

士郎

「うーん……何というか、親近感が湧くかな？」

（質問？）

虎龍

「今回出しました」

百鬼丸

2つまた質問ですが、上条当麻と坪内地丹で1番不幸なのは誰だと思えますか？それからこの世界にも天才塾がありますか？

虎龍

「幼少期の出来事から考えて上条ですね。地丹は可愛い方です」

虎龍

「いると思いますよ」

第5話：武装探偵O／中二階堂の過去？とタッグ対決と新スイッチ（後書き）

次回は欲望の交差篇・最終話

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9324z/>

仮面ライダーW～Another World Returns～

2012年1月14日22時49分発行